

第13章

ドゥリタラーシュトラ、宮殿を去る

第1節

सूत उवाच

विदुरस्तीर्थयात्रायां मैत्रेयादात्मनो गतिम् ।
ज्ञात्वागाद्धास्तिनपुरं तयावासविवित्सितः ॥ १ ॥

sūta uvāca

*viduras tīrtha-yātrāyām
maitreyād ātmano gatim
jñātvāgād dhāstinapuram
tayāvāpta-vivitsitaḥ*

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *viduraḥ*—ヴィドゥラ; *tīrtha-yātrāyām*—様々な巡礼地を旅していた間; *maitreyāt*—偉大な聖者マイトウレーヤから; *ātmanaḥ*—自己の; *gatim*—目的地; *jñātvā*—それを知ること; *agāt*—戻った; *hāstinapuram*—ハスティナープラの都; *tayā*—その知識によって; *avāpta*—十分な獲得者; *vivitsitaḥ*—知ることのできるものすべてに精通して。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「ヴィドゥラは、巡礼地をめぐりながら、偉大な聖者マイトウレーヤから自己の目的地に関する知識を授かり、そしてハスティナープラにもどった。知ろうとすることすべてに精通した人物になったのである」

要旨解説

ヴィドゥラ 『マハーバーラタ』に登場する重要人物の一人。ヴァーサデーヴァが、マハーラージャ・パーンドウの母親であるアンビカーの女給とのあいだにもうけた人物です。ヤマラージャの化身でもあります。マンドゥーカ・ムニに呪われ、シュードラとして誕生しました。この背景には次のような話があります。昔、マンドゥーカ・ムニの庵に数人の盗賊が逃げこみましたが、隠れていたところを警察に捕らえられ、とうぜん、マンドゥーカ・ムニもいっしょに捕らえられました。警察長官は、ムニにはとくに厳しく、磔の刑を言いわたします。刑が執行されようとするそのとき、王のもとに一報が入り、誤認逮捕があったこと、また相手が偉大なムニであることを知ります。王は執行を中断させ、臣下のまちがいのみず

から謝罪しました。ムニはすぐさま、生命体の運命を定めているヤマラージャのもとに向かいます。ムニから事の真相を聞かれたヤマラージャは、昔、ムニが子どものころ、藁の切っ先でアリを突き殺し、その行為ゆえにこのような窮地におちる定めにあった、と説明します。ムニは言います、なにも知らない子どもを罰するのはヤマラージャの理不尽な判断である、と。そしてヤマラージャをシュードラになるよう呪うのですが、シュードラとして生まれたヤマラージャがこのヴィドゥラであり、ドウリタラーシュトラとマハーラージャ・パーンドゥの兄弟にあたります。しかしビーシュマデーヴァは、王家に生まれたこのシュードラの子にほかの従兄弟たちと同じように接し、やがてヴィドゥラは、これもやはりブラーフマナとシュードラーニーのあいだに生まれた少女と結婚します。ヴィドゥラは父（ビーシュマデーヴァの兄弟）の遺産を受けつぐことはありませんでしたが、兄にあたるドウリタラーシュトラから十分な財産を受け取りました。ヴィドゥラは兄にたいへん執着し、いつも正しい道に導こうとしていました。クルクシェートラの戦いという同胞間の戦争のときでも、パーンドゥの子息たちを公平に扱うようくり返し嘆願したのですが、叔父の言葉を余計な口出しと考え、冒瀆さえました。この冒瀆がきっかけとなり、ヴィドゥラは巡礼に出て、旅先で出会ったマイトウレーヤから教えを授かります。

第2節

यावत्: कृतवान् प्रश्नान् क्षत्ता कौषारवाग्रतः ।
जातैकभक्तिर्गोविन्दे तेभ्यश्चोपरराम ह ॥ २ ॥

*yāvataḥ kṛtavān praśnān
kṣattā kauṣāravāgrataḥ
jātaika-bhaktir govinde
tebhyaś copararāma ha*

yāvataḥ—そのすべて; *kṛtavān*—提示した; *praśnān*—質問; *kṣattā*—ヴィドゥラという名前; *kauṣārava*—マイトウレーヤという名前; *agrataḥ*—〜がいる場所に; *jāta*—発達して; *eka*—一つ; *bhaktiḥ*—超越的愛情奉仕; *govinde*—主クリシュナへの; *tebhyaḥ*—さらなる質問に関して; *ca*—そして; *upararāma*—〜をやめた; *ha*—過去に。

さまざまな質問をし、主クリシュナへの超越的な愛情奉仕に心を定めたヴィドゥラは、マイトウレーヤ・ムニへの質問を終えた。

要旨解説

ヴィドゥラはマイトウレーヤ・リシから、人生の至高善は、ゴーヴィンダ、すなわち献愛者をあらゆる面で満足させる主シュリー・クリシュナへの崇高な愛情奉仕に立脚することであることを確信したあと、質問をやめました。物質界にいる生命体、すなわち条件づけられた魂たちは、感覚を物質的に使うことを求めています、それで満足できるわけではありません。さらに、経験や哲学的推論に頼ったり、頭脳を駆使したりして至高の真理を求めるようになります。しかしそこまで到達しても、究極のゴールが見つからなければ、ふたたび物質的な活動に逆戻りし、博愛主義や利他主義の活動をはじめますが、それでも満足できるわけでもありません。果報的活動にしる、無味乾燥な哲学的推論にしる、満足感は与えてくれません。生命体はもともと至高主・シュリー・クリシュナの永遠の召使いであり、ヴェーダ経典もその究極目標に辿りつくための教えを提供しています。『バガヴァッド・ギーター』（第15章・第15節）も、この点を確証しています。

探求心旺盛な生命体は、ヴィドゥラのように、マイトウレーヤのようなほんものの精神指導者に近づかなくてはなりませんし、知性を使い、カルマ（果報的活動）、ギヤーナ（至高真理への哲学的探求）、そしてヨーガ（精神的悟りの方法との結びつき）についてすべてを理解しなくてはなりません。精神指導者に真剣な質問をするきもちのない人は、見せかけの精神指導者を受けいれてもなんにもなりませんし、また精神指導者と言われる人でも、弟子を主シュリー・クリシュナへの超越的な愛情奉仕に導くことができなければ、師のふりをすべきでもありません。ヴィドゥラはマイトウレーヤという真の精神指導者から教えを授かることができ、人生の究極目標、すなわちゴーヴィンダへのバクティを達成しました。この境地に来れば、精神的に高められる方法を知りつくしたことになります。

第3－4節

तं बन्धुमागतं दृष्ट्वा धर्मपुत्रः सहानुजः ।
धृतराष्ट्रमे युयुत्सुश्च सूतः शारद्वतः पृथा ॥ ३ ॥
गान्धारी द्रौपदी ब्रह्मन् सुभद्रा चोत्तरा कृपी ।
अन्याश्च जामयः पाण्डोर्जातयः समुताः स्त्रियः ॥ ४ ॥

*taṁ bandhum āgataṁ dr̥ṣṭvā
dharma-putraḥ sahānujaḥ
dhṛtarāṣṭro yuyutsuś ca
sūtaḥ śāradvataḥ pṛthā*

*gāndhārī draupadī brahman
subhadrā cottarā kṛpī
anyās ca jāmayaḥ pāṇḍor
jñātayaḥ sasutāḥ striyaḥ*

tam—彼を; *bandhum*—親族; *āgatam*—そこに到達して; *dr̥ṣṭvā*—それを見ることで; *dharma-putraḥ*—ユディシュティラ; *saha-anujaḥ*—弟達と共に; *dhṛtarāṣṭraḥ*—ドゥリタラーシュトラ; *yuyutsuḥ*—サーテャキ; *ca*—そして; *sūtaḥ*—サンジャヤ; *śāradvataḥ*—クリパーチャーリヤ; *pṛthā*—クンティー; *gāndhārī*—ガンダーリー; *draupadī*—ドゥラウパディー; *brahman*—ブラーフマナ達よ; *subhadrā*—スバドゥラー; *ca*—そして; *uttarā*—ウッタラー; *kṛpī*—クリピー; *anyāḥ*—他の者達; *ca*—そして; *jāmayaḥ*—他の家族の妻達; *pāṇḍoḥ*—パンドヴァ達の; *jñātayaḥ*—家族の者達; *sa-sutāḥ*—彼らの息子達と; *striyaḥ*—女性達。

宮殿にもどってきたヴィドゥラを見た人々——マハーラージャ・ユディシュティラ、弟たち、ドゥリタラーシュトラ、サーテャキ、サンジャヤ、クリパーチャーリヤ、クンティー、ガンダーリー、ドゥラウパディー、スバドゥラー、ウッタラー、クリピー、カウラヴァ家の多くの妻たち、そして子をともなった多くの女性たち——が、歓喜に酔いしれて駆けよってかれを迎えた。長いあいだ意識を失っていた人がよみがえるかのように。

要旨解説

ガンダーリー。歴史上まれにみる理想的な貞節な女性。ガンダーラ（現在のカブール地方のカンダハル）の王マハーラージャ・スバラの娘で、未婚のとき主シヴァを崇拜していました。主シヴァは、優れた夫を求めているヒンドゥー社会の女性たちがよく崇拜する半神です。ガンダーリーは主シヴァを喜ばせることができた恩恵として、ドゥリタラーシュトラと婚約し、盲目のかれのあいだに100人の子を授かることになりました。ガンダーリーは、嫁ぐ相手が盲人であることを知り、生涯をとおして夫と暮らすためにみずからも盲目として生きる決意をします。絹の布を幾重にも目にまき、兄のシャクニに導かれてドゥリタラーシュトラに嫁いだのでした。もっとも美しい時期にあったかのじよは、女性特有の美質も十分にそなえ、カウラヴァ家のだれからも慕われました。しかし、優れた気質に恵まれるいっぽうで、女性特有の弱点もそなえていました。クンティーが男児を出産したことに嫉妬したのです。どちらも同じ時期に身ごもっていたのですが、先にクンティーが男児を出産したことでガンダーリーは強い怒りを抑えることができず、自分の腹を激しく叩きました。結果として生まれてきたのは肉の塊だけでしたが、ヴァーサデーヴァの献愛者だったことから、ヴァーサデーヴァの教えの力でその肉の塊は100個に分かれ、やがてそれぞれが健康な男児として成長していきました。こうして、100の子の母になるという望みは満たされ、高尚な

その地位にある女性にふさわしく子どもたちを育てていきました。クルクシェートラの戦いという陰謀が計画されているあいだ、かのじよはパーンダヴァ兄弟との戦いを望んでいませんでした。むしろ、親族同士の争いを引きおこした夫のドウリタラーシュトラを非難しています。パーンドウの子どもたちも自分の子なのですから、国を二つに分けて共有することを希望していたのです。戦争は終わり、我が子たちがすべて戦死してしまったことを深く悲しみ、ビーマセーナとユディシュティラを呪おうとしましたが、ヴァーサデーヴァに止められます。我が子ドウリョーダナとドウフシャーサナの死を悼む言葉を主クリシュナのまえで切々とうったえる様はじつに哀れで、主はかのじよを崇高な言葉で慰めるのでした。カルナの死も同じように悼み、カルナの妻の悲しみを主にうったえました。シュリーラ・ヴァーサデーヴァは、戦死した息子たちをガンダーリーに見せたあとかれらを天国に送り、かのじよの心を慰めました。やがて、ガンジス川河口近くのヒマラヤ山脈の密林で夫とともに他界します。山火事のなかで身を焼き、死んだのです。マハーラージャ・ユディシュティラが叔父と叔母の葬式をいとなみました。

プリター。マハーラージャ・シューラセーナの娘、そして主クリシュナの父であるヴァスデーヴァの姉。幼いころマハーラージャ・クンティボージャの養女になり、以来クンティーと呼ばれるようになりました。人格主神がもつ「成功」の力の化身です。天界の上位にある惑星の住人たちはよくクンティボージャの宮殿を訪ねていましたが、クンティーはその客人たちをもてなす役をになっていました。聖者ドウルヴァーサ・ムニという神秘家にも仕え、誠実なかのじよの奉仕に満足したムニは、どのような半神でも望みどおりに呼びよせられるマントラをさずけます。あるとき興味本位で太陽神を呼び、呼びかけに応じた太陽神はすぐに姿を現わし、かのじよとの関係を求めましたが、クンティーはその申し出を断りました。太陽神は、自分と関係をもっても処女を失うことはない約束したため、かのじよは太陽神の申し出を受けいれました。そしてクンティーは身ごもり、カルナが生まれます。太陽神の恩寵によって、かのじよはふたたび処女になりましたが、両親を恐れ、生まれたばかりのカルナを放棄しました。夫を選ぶとき、マハーラージャ・パーンドウが夫になることを望みました。結婚後、パーンドウは家族生活から離れて放棄階級になろうとします。クンティーは反対しましたが、最後には、かのじよが夫にふさわしい人物たちを呼びよせて息子たちを授かることを許しました。クンティーはその申し出を最初は断りましたが、パーンドウが堅く誓ったことから、最終的に同意しました。そしてドウルヴァーサ・ムニから授かったマントラの力でダルマラージャを呼び、その結果ユディシュティラが生まれました。ヴァーク（空）の神を呼び、ビーマが生まれました。天界の王インドラを呼び、アルジュナが生まれました。ほかの二人、すなわちナクラとサハデーヴァはパーンドウがマードゥリーとのあいだにもうけた息子たちです。やがて、マハーラージャ・パーンドウが若くして他界したとき、クンティーはあまりの悲しみに気を失いました。二人の妻、すなわちクンティーとマードゥ

リーは話しあい、クンティーが5人の幼いパンドウ兄弟を養うために生き残ることに決め、マードゥリーは死んだ夫のあとを追って命を絶つサティーの儀式をし、他界しました。二人の同意は、居合わせたシャタシュリングを含む偉大な聖者たちによって認められています。

のちに、パンドヴァ兄弟がドゥリョーナの奸策のために王国から追放されたとき、クンティーはかれらと行動をともし、その苦難の日々を同じように堪え忍びました。森で暮らしていたある日、悪魔の女性ヒディンバーがビーマを夫にほしいと申し出ます。ビーマは断りましたが、かのじよがクンティーとユディシュティラにすぎると、二人はビーマに、結婚して子をもうけるよう命じました。二人は結ばれてガトートウカチャが生まれ、この子は、父とともにカウラヴァ軍と勇敢に戦いました。またこういうことがありました。バカースラという悪魔に苦しめられていたブラーフマナの家で世話になっていたのですが、クンティーはビーマに、そのブラーフマナを守るためにバカースラを殺すよう命じました。またユディシュティラに、パంచャーラデーシャに行くよう勧めました。ドゥラウバディー（別名パంచャーリー）はこのパంచャーラデーシャでアルジュナがめとったのですが、クンティーの命令で、パンドヴァ兄弟の5人全員がかのじよの夫になりました。5人のパンドヴァ兄弟との結婚式にはヴァーサデーヴァも同席しています。クンティーデーヴィーは、最初に産んだカルナを忘れることは決してなく、カルナがクルクシェートラの戦場で死ぬと大いに嘆き悲しみ、5人の息子たちに、マハーラージャ・パンドウと結婚するまえに産んだ長男であることを打ち明けました。クルクシェートラの戦争が終わり、主が自分のふるさとに帰っていくとすると、クンティーは祈りをささげていますが、そのすばらしい内容が残されています。のちに、ガンダーリーとともに森に入り、きびしい苦行をしました。食事は30日ごとに食べるだけで、やがて最後は深い瞑想に入り、山火事で焼死しました。

ドゥラウバディー。マハーラージャ・ドゥルパダのもっとも貞操深い息女で、インドラの妻であるシャチーの化身とされています。マハーラージャ・ドゥルパダは、聖者ヤジャの指揮下で盛大な供儀祭をおこないました。最初の供物をささげたときにドゥリシュタデュムナが生まれ、2番目の供物のときにドゥラウバディーが産まれました。ですからかのじよはドゥリシュタデュムナの妹であり、パంచャーリーという名前でも知られています。5人のパンドヴァ兄弟はかのじよを共通の妻としてめとり、それぞれ息子を一人ずつ授かっています。マハーラージャ・ユディシュティラはプラティビトウ、ビーマセーナはスタソーマ、アルジュナはシュルタキールティ、ナクラはシャターニーカ、サハデーヴァはシュルタカルマーをそれぞれ授かりました。ドゥラウバディーはひじょうに美しい女性でしたが、その美しさは義理の母であるクンティーに匹敵するほどでした。産まれるとき、どこからともなく声が響き、「クリシュナーと呼ばれることになる」とお告げがありました。またそのとき、多くのクシャトリヤを殺す、とも予言されています。シャンカラの祝福の力で、優れた質を等しくそなえた5人の夫を授かりました。ドゥラウバディーはみずから婿選びの試合を用意

し、全世界から王子や国王が招かれました。パーンダヴァ兄弟と結婚したのは森での追放生活のときでしたが、国にもどってきたとき、マハーラージャ・ドウルパダは兄弟たちに持参金として莫大な富を与えました。かのじよも、ドウリタラーシュトラの義理の息女たちに暖かく迎えられました。かのじよは賭博の賭け金になりましたが、夫が勝負に負けたあと無理やり集会場に引きだされ、ビーシュマやドウローナといった年長者のまえてドウフシャーサナによって裸にされそうになりました。主クリシュナの偉大な献愛者だったドウラウバディーは主に祈り、その祈りを聞いた主は、尽きることのない布となってかのじよのからだを包み、かのじよは侮辱から救われたのでした。ジャタースラという名前の悪魔がかのじよを誘拐したことがありましたが、2番目の夫・ビーマセーナが悪魔を殺し、救いました。かのじよも自身も主クリシュナの恩寵をとおして、パーンダヴァ兄弟がマハルリシ・ドウルヴァーサに呪われるところを救っています。パーンダヴァ兄弟がヴィラータ王の宮殿に名を明かすことなく住んでいたとき、悪魔のキーチャカがドウラウバディーの美しさに魅了されましたが、ビーマに殺され、かのじよは救われました。5人の息子をアシュヴァッターマーに殺されたドウラウバディーは嘆き悲しみました。人生を終えたのは、ユディシュティラたちと隠棲の旅に出た途中です。ユディシュティラはかのじよの死亡の原因に説明していますが、かれが天界の惑星に入ったとき、天上の幸運の女神としてドウラウバディーが壮麗な姿となって住んでいる様を見ました。

スバドゥラー。ヴァスデーヴァの娘、そして主クリシュナの妹です。ヴァスデーヴァの愛しい娘であっただけではなく、クリシュナとバラデーヴァの愛しい妹でもありました。二人の兄弟とこの妹は、プリーにある有名なジャガンナータ寺院で祭られており、いまでもその寺院は毎日多くの巡礼者が訪れます。この寺院は、主が日食のときにクルクシェートラを訪ね、そこでヴリンダーヴァナの住民たちと再会した出来事を追憶するために建てられたものです。このときのラーダーとクリシュナの出会いの話は聞く者の涙をさそい、主シュリー・チャイタンニャはラーダーラーニーを思う法悦境のなかで、主シュリー・クリシュナへの思いに没頭しています。アルジュナがドウヴァーラカーにいたとき、スバドゥラーを女王として迎えたいと思い、そのきもちを主クリシュナに伝えました。シュリー・クリシュナは、兄の主バラデーヴァが別の場所でかのじよの結婚を進めていることを知っており、バラデーヴァの計画にそむくことを好まなかったため、アルジュナにスバドゥラーを誘拐するよう助言します。こうして、結婚式の一団がライヴァタの丘に向かう途中、アルジュナはシュリー・クリシュナの計画に従ってスバドゥラーを誘拐しました。シュリー・バラデーヴァは激怒し、アルジュナを殺そうとしましたが、主クリシュナがアルジュナを許すよう説得します。こうして、スバドゥラーはアルジュナと正式に結婚することができ、二人からアビマンニュが誕生しました。アビマンニュは若くして死亡し、スバドゥラーの悲しみははかりしれないものでしたが、パリークシットが誕生したことを嬉しく思い、かのじよの悲しみは癒されました。

第5節

प्रत्युज्जग्मुः प्रहर्षेण प्राणं तन्व इवागतम् ।
अभिस्राम्य विधिवत् परिष्प्राभिवादनेः ॥ ५ ॥

pratyujjagmuḥ praharṣeṇa
prāṇam tanva ivāgatam
abhisaṅgamyā vidhivat
pariṣvaṅgābhivādanaiḥ

prati—～に向かって; *ujjagmuḥ*—行った; *praharṣeṇa*—非常に喜んで; *prāṇam*—命;
tanvaḥ—肉体の; *iva*—～のように; *āgatam*—戻った; *abhisaṅgamyā*—近づいている;
vidhi-vat—正式に; *pariṣvaṅga*—抱擁している; *abhivādanaiḥ*—お辞儀をして。

からだに命がもどってきたかのように、かれらはたいそう喜んでヴィドウラに駆け寄った。
互いに抱擁し、お辞儀をしながら挨拶を交わした。

要旨解説

意識がなければ手足は動きません。しかしその意識がもどってくれば、手足も感覚もふたたび動きだし、からだの存在そのものが喜びに包まれます。カウラヴァ家の人々にとってかけがえのないヴィドウラが長く宮殿にいなかったことから、人々はそのあいだなにもしていないような心境にありました。ヴィドウラとの別れを強く感じていたかれらには、いま宮殿にもどってきたかれを沸き立つような喜びに包まれて迎えたのでした。

第6節

मुमुचुः प्रेमबाष्पौघं विरहौत्कण्ठ्यकातराः ।
राजा तमर्हयां चक्रे कृतासनपरिग्रहम् ॥ ६ ॥

mumucuḥ prema-bāṣpaugham
virahautkaṅṭhya-kātarāḥ
rājā tam arhayām cakre
kṛtāsana-parigraham

mumucuḥ—現われた; *prema*—愛情深い; *bāṣpa-ogham*—感涙; *viraha*—別れ; *autkaṅṭhya*—心配; *kātarāḥ*—悲しんで; *rājā*—ユディシュティラ王; *tam*—彼 (ヴィドウラ) に; *arhayām cakre*—捧げた; *kṛta*—～の執行; *āsana*—座る場所; *parigraham*—～の準備。

長かった離別の不安と悲しみを思いおこし、だれもが感極まってむせび泣いた。やがてユディシュティラ王が、ヴィドウラの座る場所を、そして歓待式の準備をした。

第7節

तं भुक्तवन्तं विश्रान्तमासीनं सुखमासने ।
प्रश्रयावनतो राजा प्राह तेषां च शृण्वताम् ॥ ७ ॥

tam bhuktavantam viśrāntam
āsīnam sukham āsane
praśrayāvanato rājā
prāha teṣām ca śṛṇvatām

tam—彼（ヴィドウラ）に; *bhuktavantam*—彼に充分の食べさせたあと; *viśrāntam*—休息して; *āsīnam*—座って; *sukham āsane*—快適な席に; *praśraya-avanataḥ*—本来非常に穏やかで謙虚な; *rājā*—ユディシュティラ王; *prāha*—話し始めた; *teṣām ca*—そして彼らによって; *śṛṇvatām*—聞いて。

ヴィドウラは心ゆくまで食べ、充分に休息をとったあと、ゆったりと席に座った。そして王がヴィドウラに話しかけ、集まった人々もその話しに耳を傾けた。

要旨解説

ユディシュティラ王は客人を迎えることがひじょうに上手で、家族さえもその例にもれませんでした。ヴィドウラは家族の人々に暖かく迎えられ、互いに抱擁したりお辞儀を交わしたりしました。まず沐浴やすばらしい食事が用意され、そのあと充分に休む時間も提供されました。休息をとったあと、心地よさそうに席に座ったヴィドウラに向かって、王が家族や知人にこれまで起こったことを話し始めました。それが愛する友を迎える正しい方法です。インドの道徳律によると、招かれた敵でさえも恐ろしい思いをしなくてすむように、適切にもてなさなくてはなりません。敵は自分の敵を恐れるものですが、敵を自宅に招いたとき、その敵がこちらに恐怖心を感じないようもてなすべきです。これは、ある家庭に招かれた人物は、その家庭の親戚のように迎えられるべきだということであり、この節のように、家族の人たちすべての幸せを願っていたヴィドウラの場合は言うまでもありません。こうして、ユディシュティラ・マハーラージャはほかの家族たちのまえて、話しを始めたのでした。

第8節

युधिष्ठिर उवाच

अपि स्मरथ नो युष्मत्पक्षच्छायासमेधितान् ।
विपद्गणाद्विषाग्न्यादेर्मोचिता यत्समातृकाः ॥ ८ ॥

yudhiṣṭhira uvāca
api smaratha no yuṣmat-
pakṣa-cchāyā-samedhitān
vipad-gaṇād viṣāgnyāder
mociṭā yat samāṭṛkāḥ

yudhiṣṭhiraḥ uvāca—マハーラーजा・ユディシュティラが言った; api—〜かどうか; smaratha—あなたは覚えている; naḥ—私達; yuṣmat—あなたから; pakṣa—私達にへの鳥の羽のような翳屑; chāyā—保護; samedhitān—あなたによって育てられた私達; vipat-gaṇāt—様々な災難から; viṣa—毒を盛られることで; agni-ādeḥ—火を付けられることで; mocitāḥ—〜からの救い; yat—あなたがしたこと; sa—〜と共に; mātṛkāḥ—私達の母。

マハーラーजा・ユディシュティラが言う。「叔父様。母を、そして私たちをありとあらゆる災難からいつも守っておられたことを、覚えておいででしょうか。あなたの寵愛があったからこそ、私たちは毒や放火から守られたのです」

要旨解説

マハーラーजा・パンドウが若くして他界したため、未亡人となった母、そして幼い子どもたちは、とくにビーシュマデーヴァやマハートマー・ヴィドウラといった家族の年長者たちに見守られる立場になりました。ヴィドウラは、パンドヴァ兄弟たちが置かれていた政治的立場がよくわかっており、かれらを支えていたのです。ドゥリタラーシュトラもパンドウの幼い子たちを等しく世話していたのですが、パンドウの子孫の滅亡をもくろんでいた一人であり、「国の支配者になるのは自分の息子たちだ」と考えていました。マハートマー・ヴィドウラは長男ドゥリタラーシュトラのこの策謀を見抜いていたので、ドゥリタラーシュトラに誠実に仕えてはいたものの、息子たちだけに目をかける政治的画策を快く思っていませんでした。だからこそ、なんとかしてパンドヴァ兄弟と母を守ろうとしていたのです。自分にとってはどちらも同じようにかわいい青年たちだったのですが、かれの愛情はパンドヴァ兄弟たちに向けられていました。そして、ドゥリヨーダナが従兄弟たちを落とし入れようとする良からぬ画策をきびしくとがめつつ、どちらの甥たちにも等しく愛情をかけていました。そして、息子たちのはかりごとを煽る兄を厳しく戒めるいっぽうで、ぬかり

なくパーンダヴァ兄弟の身を守ろうとしていました。宮殿内でヴィドゥラが見せていたこのような挙動から、かれがパーンダヴァたちをひいきにしていたことはだれの目にも明らかでした。マハーラージャ・ユディシュティラはここで、ヴィドゥラが宮殿を離れて長い巡礼の旅に出るまえに起こったできごとについて話しています。家族間で勃発したクルクシェートラの戦いという悲劇が終わったあとも、成長した甥たちに慈愛のまなざしを向けてくれたことを、ヴィドゥラに思いおこさせていたのです。

クルクシェートラの戦いが始まるまえ、ドゥリタラーシュトラは秘密裏に甥たちを殺そうと考えていました。そして、プローチャナに命じてヴァーラナーヴァタに家を建てさせ、その家に自分の弟の家族たちをしばらく住ませることにしました。

パーンダヴァ兄弟たちが、宮殿の人々とその地に向かおうとしていたとき、ヴィドゥラが機転を利かせ、ドゥリタラーシュトラが密かに考えていた計画を知らせました。このときの様子は『マハーバーラタ』（アーディ・パルヴァ 第114節）でくわしく述べられています。ヴィドゥラはユディシュティラに遠回しに言います、「鉄やほかの材質ではない武器が、敵を殺す鋭い武器となるだろう。そしてこの事実を知る者は殺されない」と。これは、パーンダヴァ兄弟たちは殺されるためにヴァーラナーヴァタに送られようとしている、という意味で、ヴィドゥラはこうしてユディシュティラに、新しい家ではくれぐれも油断してはならない、と警告していたのです。またそれとなく火を引き合いに出して、「火が焼きつくすのは肉体である。魂ではない。そして、魂を守る者は生き伸びる」と言います。クンティーは、ヴィドゥラとマハーラージャ・ユディシュティラの謎めいたこの会話の意味がよくわからず、なにを話していたのかあとで息子に聞くと、ユディシュティラは、「ヴィドゥラ様の話からすると、私たちが行こうとしている家は火に包まれるのかもしれませんが」と答えました。やがてヴィドゥラは変装してパーンダヴァ兄弟のまえに現われ、「新しいその家の掃除人が、月が欠けて14日目に放火するだろう」、と知らせました。それがドゥリタラーシュトラのたくらみでした。パーンダヴァ兄弟を母親もろとも殺そうとしていたのです。ヴィドゥラの警告を聞いたパーンダヴァ兄弟は家の下に掘られたトンネルから脱出しました。家は火がつけられて焼け落ちましたが、かれらが逃れたことはドゥリタラーシュトラにはわからずじまいでした。カウラヴァたちは、パーンダヴァ兄弟が焼け死んだと確信し、ドゥリタラーシュトラはかれらの葬式をしたあと祝杯をあげました。宮殿の人々は悲しみに打ちひしがれて喪に服しましたが、ヴィドゥラだけは真相を知っていたため、涙を見せることはありませんでした。パーンダヴァ兄弟がどこかで生き延びていることを知っていたのです。このような悲惨なできごとがくり返し起こりましたが、そのたびにヴィドゥラはかれらを守り、そのいっぽうでは兄のドゥリタラーシュトラが恐ろしい陰謀などくわだてることのないよう説得していました。ヴィドゥラはこのようにパーンダヴァたちをいつも愛護していたのです。鳥が羽の下で卵を守るように。

第9節

कया वृत्त्या वर्तितं वश्ररद्धिः क्षितिमण्डलम् ।
तीर्थानि क्षेत्रमुख्यानि सेवितानीह भूतले ॥ ९ ॥

*kayā vṛtṭyā vartitaṁ vaś
caradbhiḥ kṣiti-maṇḍalam
tīrthāni kṣetra-mukhyāni
sevitāniha bhūtale*

kayā—それによって; *vṛtṭyā*—手段; *vartitaṁ*—あなたはどのように暮らしたか; *vaś*—あなた御自身; *caradbhiḥ*—旅していた間; *kṣiti-maṇḍalam*—地上の各地で; *tīrthāni*—巡礼の地; *kṣetra-mukhyāni*—主要な聖地; *sevitāni*—あなたによって仕えられた; *iha*—この世界で; *bhūtale*—この惑星で。

各地を旅していたとき、どのように暮らしておられたのですか。どのような聖地や巡礼地で奉仕をされていたのでしょうか。

要旨解説

ヴィドウラは、世帯者としての雑事、とくに政治的な陰謀からのがれるために宮殿を出ていきました。すでに述べられたことですが、かれはドゥリョーダナから「シュードラの子」と呼ばれて侮辱されました。自分の祖母について気軽に話されたその状況としては、とくに場違いな話しではなかったのですが。ヴィドウラの母はシュードラーニーでしたが、ドゥリョーダナの祖母でもあり、祖母と孫のあいだでは軽い冗談は許されることもあります。しかし、口にされたことがまぎれもない事実だったことから、ヴィドウラには不快な冗談に思え、まともに侮辱されたと受けとったのです。その思いゆえに、両親との関係を断ち切り、放棄階級を受け入れる決意をしたのでした。このような準備段階をヴァーナプラスタ・アーシュラマ、すなわち地上の聖地や巡礼地を旅するための隠遁生活といいます。インドの聖地としては、ヴリンダーヴァナ、ハルドワール、ジャガンナータ・プリー、プラヤーガなどがあり、そこには偉大な聖者たちが数多く住み、精神的に高められる意欲を持つ人々が無料で食事ができる施設が作られています。マハーラージャ・ユディシュティラは、ヴィドウラがそのような無料の食堂 (*chatra*・チャトウラ) に頼っていたのかどうか知りたいと思っています。

第10節

भवद्विधा भागवतास्तीर्थभूताः स्वयं विभो ।

तीर्थीकुर्वन्ति तीर्थानि स्वान्तःस्थेन गदाभृता ॥ १० ॥

bhavad-vidhā bhāgavatās
tīrtha-bhūtāḥ svayam vibho
tīrthī-kurvanti tīrthāni
svāntaḥ-sthena gadābhṛtā

bhavad—あなた自身; *vidhāḥ*—～のような; *bhāgavatāḥ*—献愛者達; *tīrtha*—巡礼地という聖地; *bhūtāḥ*—～に変えて; *svayam*—個人的に; *vibho*—力強い方よ; *tīrthī-kurvanti*—巡礼地という聖なる場所にする; *tīrthāni*—聖地; *sva-antaḥ-sthena*—心の中に位置されて; *gadā-bhṛtā*—人格主神。

主よ。あなたのような高尚な献愛者は聖地の権化でもあります。心の内に人格主神を胸にいだいておられるからこそ、どのような場所でも聖地に変えてしまうのです。

要旨解説

人格主神はさまざまな力をとおしてあらゆる場所に遍在しています。それは、電力が空間全体に浸透している様に似ています。同じように、主が遍在していることは、電気が電球をとおして現われているように、ヴィドゥラのような純粋で無垢な献愛者によって知覚され、また表わされます。ヴィドゥラのような純粋な献愛者は、主の存在をいつでも、どこにでも感じています。いっさい万物を主の力のなかに、主をいっさい万物のなかに見ることができるとのことです。地球各地の聖地は、主の無垢な献愛者の存在が作り出す精神的な力にあふれた環境をとおして、人間のけがれた意識を清めるためにあります。聖地を訪れる人は、その地に住む純粋な献愛者を探しもとめ、教えを授かり、その教えを実生活に応用し、やがて究極の解放、すなわちふるさとへ、神のもとへ返る準備をしなくてはなりません。巡礼の聖地に行くのは、ガンジス川やヤムナー川でただ沐浴したり、その地にたてられた寺院を訪ねたりするためではありません。人格主神に仕えることだけを生涯の望みとしているヴィドゥラの代表者を見つけなくてはならないのです。人格主神は、果報的活動や夢物語の推論とは無縁の純粋無垢な奉仕をしている純粋な献愛者といつも行動をともにしています。かれらは、とくに聞いて唱えるという方法をとおして主に真実の奉仕をしています。そして、権威者から話しを聞き、主の栄光を唱え、歌い、そして主の栄光について書きつづります。マハームニ・ヴァーサデーヴァはナーラダから聞き、そして執筆をとおして唱えました。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは父親から学び、学んだことをパリークシットに説明しました。それが『シュリーマド・バーガヴァタム』を学ぶ方法です。ですから、主の純粋な献愛者は、自分の行動をとおしてどのような場所でも巡礼地に変貌させることができ、その聖地はかれら

がいるからこそ聖地と呼ばれるにふさわしい場所になります。その純粋な献愛者は、どれほどけがれきった場所でも神聖化させることができるのですから、聖地で聖職者の仕事をしながら、そしていかがわしいことをする不純な人間たちが不浄にしてしまった聖地も、純粋な献愛者によって浄化されるのです。

第 1 1 節

अपि नः सुहृदस्तात बान्धवाः कृष्णदेवताः ।
दूषाः श्रुता वा यदवः स्वपुर्या सुखमासते ॥ ११ ॥

*api naḥ suhṛdaḥ tāta
bāndhavāḥ kṛṣṇa-devatāḥ
dṛṣṭāḥ śrutā vā yadavaḥ
sva-puryām sukham āsate*

api—～の場所; *naḥ*—私達の; *suhṛdaḥ*—幸福を願う者達; *tāta*—叔父; *bāndhavāḥ*—友人達; *kṛṣṇa-devatāḥ*—主シュリー・クリシュナへの奉仕にいつも没頭している者達; *dṛṣṭāḥ*—彼らを見ることで; *śrutāḥ*—あるいは彼らについて聞くことで; *vā*—どちらか; *yadavaḥ*—ヤドゥ家の末裔; *sva-puryām*—住居の場所で; *sukham āsate*—彼らが幸せかどうか。

叔父様。ドウヴァーラカーに行かれたのでしょうか？ その聖地には、主シュリー・クリシュナへの奉仕にいつも没頭している友や私たちの幸せを願うヤドゥ家の人々が住んでいます。あの方たちに会われ、あるいはあの方たちについて話しを聞かれたのではないのでしょうか。皆、幸せに暮らしているのでしょうか？

要旨解説

この節にある *kṛṣṇa-devatāḥ* (クリシュナ・デーヴァターハ) という言葉は、主クリシュナへの奉仕にいつも打ちこんでいる人々を指し、とても重要です。主クリシュナのこと、そして主クリシュナがくりひろげたさまざまな活動について聞くことに没頭しているヤーダヴァ家とパーンダヴァ家の人々は、ヴィドゥラと同じように、すべて純粋な献愛者です。ヴィドゥラは主への奉仕に完全に身をゆだねるために宮殿を去ったのですが、かれらも主クリシュナへの思いに没頭していました。ですから、どちらの心にも純粋な献愛奉仕の気持ちが変わることなく流れていたのです。家にとどまっていようと、あるいは家を出ていこうと、純粋な献愛者のほんとうの資質とは、クリシュナを好意的に思っていることにあります。それはすなわち、主クリシュナが絶対人格主神であることがよくわかっている境地です。カムサ、ジャ

ラーサンダ、シシュパーラをはじめとする悪魔たちも、主クリシュナへの思いに没頭していましたが、別の意味で、つまり敵意の目で、クリシュナを桁外れの力を持つ男としてしか見ていませんでした。ですから、カムサやシシュパーラは、ヴィドウラ、パーンダヴァ兄弟、ヤーダヴァ家の人々のような純粋な献愛者と同じ状態にいたわけではありません。

マハーラージャ・ユディシュティラも、主クリシュナとドウヴァーラカーに住む人々に思いを馳せていました。その思いがなければ、ヴィドウラからこのようなことを聞こうとはしなかったはずで、すなわちマハーラージャ・ユディシュティラは、王国にかかわる世事にかかわってはいたものの、ヴィドウラと同じような主クリシュナへの愛情をそなえていた人物だったのです。

第 1 2 節

इत्युक्तो धर्मराजेन सर्वं तत् समवर्णयत् ।
यथानुभूतं क्रमशो विना यदुकुलक्षयम् ॥ १२ ॥

*ity ukto dharma-rājena
sarvaṁ tat samavarṇayat
yathānubhūtaṁ kramaśo
vinā yadu-kula-kṣayam*

iti—このように; uktaḥ—尋ねられて; dharma-rājena—ユディシュティラ王によって; sarvaṁ—すべて; tat—それ; samavarṇayat—適切に説明した; yathā-anubhūtam—自分が体験したように; kramaśaḥ—次々に; vinā—～抜きで; yadu-kula-kṣayam—ヤドゥ家の消滅。

マハーラージャ・ユディシュティラに尋ねられたマハートマー・ヴィドウラは、これまでみずから体験してきたことすべてを語った。ヤドゥ家の消滅の知らせを除いて。

第 1 3 節

नन्वप्रियं दुर्विषहं नृणां स्वयमुपस्थितम् ।
नावेदयत् सकरुणो दुःखितान् द्रष्टुमक्षमः ॥ १३ ॥

*nanv apriyaṁ durviśahaṁ
nṛṇāṁ svayam upasthitam
nāvedayat sakaruṇo
duḥkhitān draṣṭum akṣamaḥ*

nanu—実際のところ; apriyam—受け入れがたい; durviṣaham—耐えられない; nṛṇām—人類の; svayam—それなりに; upasthitam—出現; na—～しなかった; āvedayat—表現した; sakaruṇaḥ—情深い; duḥkhitān—苦しんで; draṣṭum—見る事; akṣamaḥ—～できない。

情けぶかいマハートマー・ヴィドウラは、パーンダヴァ兄弟が苦しむ様子は、どのようなときでも目にしたくなかった。だから自然のなりゆきとして起こった、あの受けいれがたく、そして耐えられないできごとをどうしても口にすることができなかつたのである。

要旨解説

『ニーティ・シャーストラ』（道徳律）では、人に苦痛をもたらす不快な事実を話してはいけない、とされています。苦しみは自然界の法則のなりゆきで生じるものですから、そのような情報を広めることで苦しみを増大させるべきではありません。ヴィドウラのような慈悲深い魂にとって、とりわけ愛するパーンダヴァ兄弟とかかわることは、ヤドウ家が滅亡したという耐えがたい知らせは、どうしても口にすることができませんでした。だから、あえてその話しをしなかつたのです。

第 1 4 節

कञ्चित्कालमथावात्सीत्सत्कृतो देवत्सुखम् ।
भ्रातुर्ज्येष्ठस्य श्रेयस्कृत्सर्वेषां सुखमावहन् ॥ १४ ॥

kañcit kālam athāvātsīt
sat-kṛto devavat sukham
bhrātur jyeṣṭhasya śreyas-kṛt
sarveṣāṃ sukham āvahan

kañcit—数日間; kālam—時; atha—そのように; avātsīt—住んだ; sat-kṛtaḥ—もてなされて; deva-vat—まさに神聖な人物のように; sukham—快適さ; bhrātuḥ—兄弟の; jyeṣṭhasya—兄の; śreyaḥ-kṛt—彼に善を施すために; sarveṣāṃ—その他全員; sukham—幸福; āvahan—可能にした。

マハートマー・ヴィドウラは、このように親族たちに神聖な人物のようにもてなされ、しばらくその地にとどまった。それはただ兄の心を改めるためであり、そうすることで周囲の人々すべてに幸せをもたらすことができたからである。

要旨解説

ヴィドゥラのような神聖な人物は、天国の住人のようにもてなさなくてはなりません。当時は、天国の住人がマハーラージャ・ユディシュティラのような人物の家を訪れたり、またアルジュナのように、上位の惑星を尋ねたりする人々もよくいました。ナーラダは物質宇宙でも、また精神界にでさえ自由に往来のできる宇宙飛行士でした。ナーラダでさえマハーラージャ・ユディシュティラの宮殿をよく来るがあったのですから、天上界の半神が訪ねてくるのはいうまでもありません。惑星間の旅行を可能にしてくれるのは、たとえ現在の肉体を持っている状態であっても、精神的文化なのです。ですからマハーラージャ・ユディシュティラは、半神を歓待するように、ヴィドゥラをもてなしたのです。

マハートマー・ヴィドゥラはすでに放棄階級を受け入れていたため、世俗の慰安を楽しむために両親の宮殿にもどることはありませんでした。マハーラージャ・ユディシュティラからのもてなしは、みずからの慈悲心から受け入れていたのですが、宮殿にとどまった理由は、俗生活に強く執着しすぎていた兄のドウリタラーシュトラを救うことにありました。マハーラージャ・ユディシュティラとの戦争が終わり、国も子どもも失ったかれは、あまりの虚脱感のために、マハーラージャ・ユディシュティラからの施しや厚意に甘んじることに羞恥心さえ感じていませんでした。マハーラージャ・ユディシュティラからしてみれば、叔父にはそれ相応の世話をすることは妥当なふるまいだったのですが、ドウリタラーシュトラがその寛大さに甘んじるのは望ましいことではありません。ドウリタラーシュトラはほかにすべはない、という思いで厚意を受け入れていたのです。ヴィドゥラはそんなドウリタラーシュトラを目ざめさせるためにかれを訪ね、より高い精神的な理解をさずけようとしていました。達観した魂の義務は墮落した魂を救うことにあり、ヴィドゥラはそのためにやってきたのです。しかしまた、精神的な啓発に関する話しは聞く人々に力を与えるものであり、ヴィドゥラは集まっていた家族たちすべての気持ちを引きつけ、かれらも喜びを感じながらじっと聞きっていました。これが精神的悟りの道です。その教えは傾注されなくてはなりませんし、また悟った魂が語っている教えは、条件づけられた魂の眠っている心に訴えかけるのです。そして、その教えを聞きつづけることによって、私たちは自己の悟りという完璧な境地に到達することができるのです。

第 15 節

अभिभ्रदर्यमा दण्डं यथावदघकारिषु ।

यावद्धार शूद्रत्वं शापाद्दर्शितं यमः ॥ १५ ॥

abibhrad aryamā daṇḍam

yathāvad agha-kāriṣu
yāvad dadhāra sūdratvam
śāpād varṣa-śatam yamaḥ

abibhrat—管理した; aryamā—アリヤマー; daṇḍam—処罰; yathāvat—それが適切だったため; agha-kāriṣu—罪を犯した者達に; yāvat—～である間; dadhāra—受け入れた; sūdratvam—シュードラの神殿; śāpāt—呪いの結果として; varṣa-śatam—100年間; yamaḥ—ヤマラージャ。

ヴィドゥラがマンドゥーカ・ムニに呪われてシュードラとなり、シュードラとして生きていたあいだ、アリヤマーがヤマラージャの職務をつとめ、罪を犯した者たちを罰していた。

要旨解説

ヴィドゥラはシュードラの女性の体から誕生したため、兄弟のドウリタラーシュトラやパードウとともに王室の一員として暮らすことができませんでした。ではなぜヴィドゥラは、博識な王やクシャトリヤというドウリタラーシュトラやマハーラージャ・ユディシュティラのような人々に教えを授ける立場になることができたのでしょうか。その答としてまず言えるのが、確かにヴィドゥラはシュードラとして生まれた人物ではあっても、リシ・マイトウレーヤの権威によって精神的啓発を受け、超越的な知識を完全に授かって世界を放棄したため、アーチャーリヤ、すなわち精神的教師という地位につく十分な能力を備えていた、という点です。シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブによれば、超越的な知識、すなわち神の科学に精通している人物であれば、ブラーフマナやシュードラでも、世帯者でもサンニャーシーでも、精神指導者になる資格があります。大政治家、そして道徳家でもあったチャーナキャ・パンディタが説いた一般的な道徳律によると、たとえシュードラにも劣る地位で生まれた人物からでも、私たちは教えを受け入れることができます。これが最初の答です。さらに別の視点から、ヴィドゥラはほんとうはシュードラではなかった、という点が挙げられます。マンドゥーカ・ムニに呪われたことで、いわゆるシュードラとして100年間生きなくてはならなかったのです。ヴィドゥラは、12人のマハージャナの一人であるヤマラージャの化身であり、ブラフマー、ナーラダ、シヴァ、カピラ、ビーシュマ、プラフラーダなど、気高い人物と同じレベルにいた人物です。ヤマラージャは、マハージャナの一人として、ナーラダブラフマーやほかのマハージャナたちのように世界の人々に献愛奉仕の文化を説く義務を持っていました。しかしヤマラージャは、悪事を働く者たちを冥界で罰する本務にいつも追われています。かれは主によって地球から遠く離れたある惑星に遣わされ、墮落した魂たちが死んだあと、かれらの罪なおこないに応じてそれぞれの罪を断罪し、その惑星に連れていきます。このように、ヤマラージャには、犯罪者を罰する責任ある本務から離れる時

間はほとんどありません。世界には、徳高い人間よりも悪事を働く人間のほうが多くはびこっています。ですからヤマラージャは、至高主の権威ある代表者であるほかの半神たちよりもはたすべき任務がたくさんあります。しかし、主の栄光を讃えたいと考えたヤマラージャは、主の意志によってマンドゥーカ・ムニに呪われ、ヴィドゥラという化身となってこの世界に現われ、偉大な献愛者として懸命に活動しました。そのような献愛者がシュードラやブラーフマナであるはずがありません。俗世界の区分けを超えているのです。いわば、人格主神が豚の姿で化身しても、その正体は豚でもブラフマーでもないのと同じです。主は、俗世界のすべての生き物を超えた存在です。主と、主の権威あるさまざまな献愛者たちは、条件づけられた魂たちの注意を喚起するために、ときとして数多くの下等な生き物としての役割を演じることがありますが、主も純粋な献愛者も、つねに超越的な境地にいます。ヤマラージャがこのようにヴィドゥラとなって化身したとき、その職務はカッシャパとアディティの息子たちの一人であるアリヤマーによって遂行されました。アーディテャとはアディティの子どもたちで、12人のアーディテャがいます。アリヤマーは12人のアーディテャの一人でしたから、ヤマラージャがヴィドゥラとして100年間職務を離れているあいだ任務を代行するにふさわしい人物でした。結論として言えるのは、ヴィドゥラはシュードラでは決してなく、もっとも純粋なブラーフマナよりも偉大な人物だった、という事実です。

第16節

युधिष्ठिरो लब्धराज्यो दृष्ट्वा पौत्रं कुलन्धरम् ।
भ्रातृभिर्लोकपालाभैर्मुमुदे परया श्रिया ॥ १६ ॥

*yudhiṣṭhiro labdha-rājyo
dṛṣṭvā pautram kulan-dharam
bhrātr̥bhir loka-pālābhair
mumude parayā śriyā*

yudhiṣṭhiraḥ—ユディシュティラ; *labdha-rājyaḥ*—世襲の王国を所有している; *dṛṣṭvā*—見ること; *pautram*—孫; *kulam-dharam*—王家にまさにふさわしい; *bhrātr̥bhiḥ*—兄弟達によって; *loka-pālābhaiḥ*—全員が熟達した行政者である者; *mumude*—生活を満喫した; *parayā*—非凡な; *śriyā*—富。

マハーラージャ・ユディシュティラは、自分の王国を所有し、高貴な家族の伝統を継ぐにふさわしい一人の孫の誕生に恵まれ、一般市民を治める熟達した行政官揃いの弟たちと協力しあいながら国を統治し、非凡な富を満喫した。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラとアルジュナは、クルクシェートラの戦いが始まるまえから仲間たちと戦いを交えることに心を痛めていたのですが、義務をはたすためにもその戦いは避けられませんでした。それが主シュリー・クリシュナの至高の意志だったからです。戦いが終わったあとも、大勢の人々が殺されたことをマハーラージャ・ユディシュティラは悲しんでいました。まさに、パーンダヴァ兄弟以外にクル家を継承させる人々はいなかったのです。ただ一つ残されていた希望が義理の娘ウッターのおなかにいた子で、アシュヴァッターマーに襲われたものの主の恩寵でその子は救われました。こうして混乱していた状況をすべて解決させ、国に平和な秩序をもたらしたあと、生き残った子、つまりパリークシットを見るマハーラージャ・ユディシュティラの心は満たされ、たとえ幻想ではかない物質的な幸福に魅力は感じてはいなかったものの、ふつうの人として安らぎの気持ちを味わったのでした。

第 17 節

एवं गृहेषु सक्तानां प्रमत्तानां तदीहया ।
अत्यक्रामदविज्ञातः कालः परमदुस्तरः ॥ १७ ॥

*evam gr̥heṣu saktānām
pramattānām tad-īhayā
atyakrāmad avijñātaḥ
kālaḥ parama-dustaraḥ*

evam—このように; *gr̥heṣu*—家族の物事の中で; *saktānām*—過度に執着している人々の; *pramattānām*—異常に執着している; *tad-īhayā*—そのような思いに没頭して; *atyakrāmat*—超えた; *avijñātaḥ*—知らないうちに; *kālaḥ*—永遠な時; *parama*—非常に; *dustaraḥ*—克服できない。

だれも克服できない永遠なる「時」は、家族の雑事にあまりに執着し、その思いにいつも没頭している者を、知らぬまに屈服させている。

要旨解説

「私は幸せだ。私にはすべてが揃っている。銀行にも十分な預金がある。我が子たちにも十分な財産を与えることができる。私は成功したのだ。哀れな物もらいのサンニャーシーは神にすがっているが、私のところに寄付を乞いに来るではないか。だから私は最高の神さえ

凌ぐ人間なのだ」。これが、永遠の時の移り変わりを見ることのできない、異常に執着した世帯者たちの考えです。人の寿命はすでに定められており、至高の意志に命じられて決定された時に反して1秒たりとも延ばすことはできません。そのような貴重な時は、とくに人間のために用意されていますから、注意深く使わなくてはなりません。なぜなら、知らぬまに過ぎていく時がたった1秒であっても、重労働の結果で得る何千枚もの金貨と交換しても取りかえすことはできないからです。人間生活の毎瞬間が、840万種の生物種の循環で誕生と死をくり返す人生の問題に終止符を打つためにあります。誕生、死、病気、老年に縛られる物質の体は、生命体のすべての苦しみの原因なのですが、生命体そのものは永遠です。生まれることも、死ぬこともありません。愚かな人々はこの問題を忘れていました。人々は人生の問題をどう解決するのかまったく知らないのに、生老病死という大きな問題を解決させることなく、永遠な時が知らぬまに過ぎて定められた寿命が刻一刻と減っていくことを知らず、家族にかかわる一時的な物事に没頭しきっています。これが幻想です。

しかしその幻想も、主に献愛奉仕をして目覚めている人のなかで機能することはできません。ユディシュティラ・マハーラージャを筆頭とするパーンダヴァ兄弟たちは主シュリー・クリシュナへの奉仕に没頭しており、物質界にあるまぼろしの幸せに心を奪われることはほとんどありませんでした。これまで話し合ってきたように、マハーラージャ・ユディシュティラの心は主ムクンダ（解放を授けることのできる主）に定められていましたから、天国で手に入れられるほどの快適な生活にでさえ魅了されませんでした。ブラフマローカ惑星で得られる幸せも結局は一時的で幻想だからです。生命体は永遠ですから、神の王国という永遠な住居（パラヴォーマ）だけでしか幸福にはなれません。その国に行く人は、誕生、死、病気、老年がくり返されるこの物質界に戻ってくることはありません。ですから、どれほど快適な生活をおくったり物質的な幸せを感じたりしても、それが永遠な生活を保証してくれないのであれば、永遠な生命体にとってはどれも幻想にすぎません。この事実をしっかり理解している人こそが賢いのであり、そのような博識な人物は、ほんとうに望ましい目標であるブラフマ・スカン（brahma-sukham）「絶対的な幸福」を得るためであれば、どれほどの物質的幸福でも犠牲にすることができます。真の超越主義者はこの幸福に飢えています。おなかをすかした人は食べ物食べられない快適な生活では幸福になれないように、永遠で絶対的な幸福に飢えている人は、物質的な幸福をどれほど与えられても満足することはありません。ですから、この節で述べられている教えはマハーラージャ・ユディシュティラ、その兄弟や母親に向けられているのではなく、ヴィドゥラがとくに教えを授けるためにやってきた相手、すなわちドゥリタラーシュトラのような人々に用意されているのです。

第 18 節

विदुरस्तदभिप्रेत्य धृतराष्ट्रमभाषत ।
राजनिर्गम्यतां शीघ्रं पश्येदं भयमागतम् ॥ १८ ॥

*viduras tad abhipretya
dhṛtarāṣṭram abhāṣata
rājan nirgamyatām śīghram
paśyedaṁ bhayam āgatam*

viduraḥ—マハートマー・ヴィドウラ; *tat*—それ; *abhipretya*—そのことをよく知っている;
dhṛtarāṣṭram—ドゥリタラーシュトラに; *abhāṣata*—言った; *rājan*—王よ; *nirgamyatām*—すぐ
に出てください; *śīghram*—一刻も遅れることなく; *paśya*—よく見つめよ; *idam*—この;
bhayam—恐れ; *āgatam*—すでに到来している。

マハートマー・ヴィドウラにはそれがよくわかっていた。だからドゥリタラーシュトラに
言ったのである。「王よ、すぐにここから出てください。一刻の猶予も許されません。恐怖
心にとりつかれている自分をよく見つめるのです」と。

要旨解説

冷酷な死はだれも容赦しません。ドゥリタラーシュトラであろうと、マハーラージャ・ユ
ディシュティラであろうと。ですから、年老いたドゥリタラーシュトラに授けられたように、
精神的なこの教えは若いマハーラージャ・ユディシュティラにもあてはまることでした。実
際、国王やその兄弟や母親を含む宮殿にいただれもが、ヴィドウラの話しに真剣に聴きいっ
ていました。しかしヴィドウラの教えは、あまりにも物質的になっていたドゥリタラーシュ
トラのために授けられていました。この節にある *rājan* (ラージャン) は、特に重大な意味をこ
めてドゥリタラーシュトラに向けられています。ドゥリタラーシュトラは長男だったため、
ハスティナープラの王として王座を受け継ぐはずでした。しかし盲目として生まれたことか
ら、その正当な主張ができない立場にありました。こうして自分の不遇を嘆いていたのです
が、その嘆きは、弟のパーンドゥが死ぬことで償われることになります。弟パーンドゥは幼
い子どもたちを残して他界しており、自然に、ドゥリタラーシュトラは彼らを守る立場に置
かれました。ところが、内心では自分が国王になり、その国をドゥリョーナを筆頭とする
我が子たちに受け継がせたいと考えていました。王座への野心を胸に秘めたドゥリタラーシ
ュトラは、国王になるため、義理の兄弟であるシャクニと結託してあらゆる奸策をめぐらし
ました。しかしすべてが主の意志で挫折し、人生の終末を迎えようとしていたのですが、人

も財産もすべて失ったというのに、マハーラージャ・ユディシュティラの最年長の叔父だったことから、国王の座にしがみついていた。マハーラージャ・ユディシュティラは、義務としてドウリタラーシュトラを名誉ある王として養い、ドウリタラーシュトラも、自分は国王である、あるいはユディシュティラ王の名誉ある叔父である、という幻想をいだきながら、残された限りある日々を安穩とすごしていました。ヴィドゥラは、聖者の立場として、そして愛情を寄せるドウリタラーシュトラの弟として、病と老年という眠りからなんとかしてドウリタラーシュトラを目覚めさせなくてはならない、という責任を感じていました。だからこそヴィドゥラはドウリタラーシュトラに皮肉をこめて、実際はそうではなかったのですが、「王よ」と呼びかけたのです。だれもが永遠なる「時」の召使いですから、物質界ではだれも王になることはできません。王、とは、命令を下すことのできる人物です。名高いイギリス国王は時の流れに命令したかったのですが、時の流れはその命令を拒みました。ですから私たちは物質界のなかで偽りの国王として生きているのであり、ドウリタラーシュトラも、そのような偽りの地位のことを、そしてその時すでに迫っていた恐ろしい現実を迎えなくてはならないことを告げられたのです。ヴィドゥラは、刻々と迫ってくるその恐ろしい瞬間からドウリタラーシュトラが救われるよう、すぐにここから立ち去るように、と言い放ちました。その思いが向けられたのはマハーラージャ・ユディシュティラではありません。ヴィドゥラは、マハーラージャ・ユディシュティラがこのもろい物質界の恐ろしさ知っていることも、やがて自分がいなくなった未来でも、ユディシュティラが自分なりに正しく対応できることもよくわかっていました。

第19節

प्रतिक्रिया न यस्येह कुतश्चित्कर्हिचित्प्रभो ।
स एष भगवान् कालः सर्वेषां नः समागतः ॥ १९ ॥

*pratikriyā na yasyeha
kutaścit karhicit prabho
sa eṣa bhagavān kālah
sarveṣām naḥ samāgataḥ*

pratikriyā—救済対策; *na*—なにもない; *yasya*—その; *iha*—この物質界で; *kutaścit*—どうしても; *karhicit*—あるいは誰によっても; *prabho*—主人よ; *saḥ*—それ; *eṣaḥ*—明確に; *bhagavān*—人格主神; *kālah*—永遠なる時; *sarveṣām*—すべての; *naḥ*—我々の; *samāgataḥ*—到着した。

この恐ろしい状況は、物質界にいるだれであっても改善することはできません。主人よ、

私たち全員に切迫しているのは、永遠なる時(カーラ・kāla)という最高人格主神なのです。

要旨解説

死という過酷な手を阻止できる優れた力はどこにもありません。どれほど激しい身体上の苦痛にさいなまれていても、だれも死にたいとは思いません。いわゆる科学的知識が発達している現代でも、老年や死を解決できる治療法はありません。老年とは、残酷な時によって暗示されている死の到来の予告です。これがドゥリタラーシュトラの前に示されました。ドゥリタラーシュトラは以前から何度もヴィドゥラに命令をしていたことから、いま差し迫っている恐ろしい状況に対する解決策をヴィドゥラに尋ねるかもしれないからです。しかしドゥリタラーシュトラがそう命じる前に、ヴィドゥラのほうから、だれもその治療法を示すことはできないし、物質界のどこにもその治療法は見つからない、と知らせました。そして、そのようなものは物質界には存在しないことから、死とは最高人格主神そのものであり、それは主自ら『バガヴァッド・ギーター』(第10章・第34節)によって言われていることです。

死はだれも止めることはできませんし、物質界にあるどのようなものでも止めることはできません。ヒラニヤカシプは不死身になろうとし、全宇宙を震撼させるほどの厳しい苦行をしたためブラフマー自身が彼を訪れ、その厳しい修行を思いとどまらせようとなりました。ヒラニヤカシプはブラフマーに不死身の祝福を授けてくれるよう求めましたが、ブラフマーは、自分でさえ、また宇宙の頂点の惑星にいても死ぬのだから、不死身の恩恵を授けることなどできようか、と答えます。この宇宙の頂点にある惑星でさえ死は免れないのですから、ブラフマーが住むブラフマローカよりも遙かに質的に劣る他の惑星で不死身になれるわけがありません。永遠の時が影響を及ぼしている場所には、生老病死という一連の苦境も必ずあり、またその苦境はだれも克服することができません。

第20節

येन चैवाभिपन्नोऽयं प्राणैः प्रियतमैरपि ।
जनः सद्यो वियुज्येत किमुतान्यैर्धनादिभिः ॥ २० ॥

yena caivābhipanno 'yam
prāṇaiḥ priyatamair api
janaḥ sadyo viyujyeta
kim utānyair dhanādibhiḥ

yena—そのような時に引かれて; ca—そして; eva—確かに; abhipannaḥ—襲われて;

ayam—これ; prāṇaiḥ—命と共に; priya-tamaiḥ—だれにも大切なもの; api—～ではあるが; janaḥ—人物; sadyaḥ—すぐに; viyujyeta—放棄する; kim uta anyaiḥ—他の物事は言うまでもない; dhana-ādibhiḥ—富、名誉、子ども、土地、家のようなもの。

至上のカーラ（永遠なる時）にもてあそばされている者はだれであろうと、自分にとってかけがいのないものを捨てることを余儀なくされるのですから、富、名声、子ども、家庭など、どのような財産でも手放さなくてはならないのです。

要旨解説

ある有名なインド人の科学者は、計画策定の勤めに多忙な日々をすごしていたのですが、ある重要な計画委員会の会議に出席する途中、突然、姿なき永遠な時に襲われ、命、妻、子どもたち、家、土地、財産などすべてを手放すはめになりました。インドでの政治的動乱期では、インドがパキスタンとヒンドウスタンに分割され、時代という力によって、裕福で影響力のあった多くのインド人が命や財産や名誉を捨てる羽目に陥りましたが、このような例は世界の、いや宇宙の歴史に幾度となく起こったことであり、どれも時の影響力が現われたものです。ですから、結論として言えるのは、時の力に対抗できる力を持つ生命体は宇宙にはいない、ということです。時の力によって宇宙では何度も荒廃が起こり、それはどのような方法を使っても、だれも止めることができませんでした。日々の生活のなかでも、私たちにかなすすべのない多くの出来事が繰り返りかえし起こっていますが、対策を講ずることができないまま、苦しみ、そして耐えなくてはなりません。それが時の力の結果なのです。

第 2 1 節

पितृभ्रातृसुहृत्पुत्रा हतास्ते विगतं वयम् ।
आत्मा च जरया ग्रस्तः परगेहमुपाससे ॥ २१ ॥

pitṛ-bhrāṭṛ-suhṛt-putrā
hatās te vigataṁ vayam
ātmā ca jarayā grastah
para-geham upāsase

pitṛ—父親; bhrāṭṛ—兄弟; suhṛt—幸福を願う人々; putrāḥ—息子達; hatāḥ—全員死んで; te—あなたのもの; vigatam—費やした; vayam—年齢; ātmā—体; ca—もまた; jarayā—病弱になって; grastah—征服されて; para-geham—他人の家; upāsase—あなたは暮らしている。

あなたの父上、兄弟、幸福を願う人々、息子たちは、すでに他界してこの世にはおりませ

ん。あなた自身も生涯の大半を使い果たし、その体もいまや病弱となり、そして他人の家に住んでいます。

要旨解説

ドゥリタラーシュトラ王は、冷酷な時に操られている現在の危機的境遇を知らされ、これまでの体験に照らして、自分の生涯に起こった出来事をもっと知的に見つめるべきだったことを思い知らされています。父ヴィチトゥラヴィーリャは他界して久しく、彼や弟たちが幼かったころ、自分たちが成長できたのはビーシュマデーヴァの世話と優しさのおかげでした。そして弟のパンドウも死にます。次にクルクシュートラの戦いで、自分の幸せを望んでくれるビーシュマデーヴァ、ドロナーチャーリャ、カルナ、その他多くの王と友人が、さらには100人の息子たちも戦死しました。こうして仲間も財産もすべて失い、いまでは、それまでさんざん苦しめてきた甥の情けにすがって暮らしているのです。それでも王は、これほど不運な境遇にありながら、もっともっと生き延びたいと考えていたのです。ヴィドウラがドゥリタラーシュトラに知らせたかったのは、だれであろうと、自分の行動と主の慈悲によって自分を守らなくてはならない、ということです。結果は至上の権威者にゆだね、自分の義務を忠実に果たさなくてはなりません。至高主に守られていない人は、どのような友も、子どもも、父親も、兄弟も、国も、だれであろうと守ることはできません。ですから、私たちは至高主の保護を求めなくてはなりません。人間生活はその保護を得るためにあるのです。ドゥリタラーシュトラは自分が置かれている危機的状況を思い知らされ、その警告の言葉がヴィドウラによって続けられます。

第22節

अन्धः पुरैव वधिरो मन्दप्रज्ञाश्च साम्प्रतम् ।
विशीर्णदन्तो मन्दाग्निः सरागः कफमुद्ग्रहन् ॥ २२ ॥

*andhaḥ puraiṣva vadhiro
manda-prajñāś ca sāmpratam
viśirṇa-danto mandāgniḥ
sarāgaḥ kapham udvahan*

andhaḥ—盲目の; *purā*—最初から; *eva*—確かに; *vadhirah*—耳が遠い; *manda-prajñāḥ*—記憶力の欠如; *ca*—そして; *sāmpratam*—最近; *viśirṇa*—抜けている; *dantaḥ*—歯; *manda-agniḥ*—肝臓の機能が減退している; *sa-rāgaḥ*—音と共に; *kapham*—咳をして痰をたくさん出している; *udvahan*—出ている。

あなたは生まれたときから目が見えず、最近では耳も遠くなっている。物覚えはひどくなり、理解力も衰えている。歯は抜け、肝臓の機能は減退し、咳きこんで痰をたくさん出しておられる。

要旨解説

ドゥリタラーシュトラの体にはすでに老年の兆しが現われており、迫っている死期を警告するためにその症状が一つ一つ指摘されているのですが、愚かなことに、ドゥリタラーシュトラは自分の未来を心配することはまったくありませんでした。ドゥリタラーシュトラの身体についてヴィドゥラが指摘した兆候を *apakṣaya* (アパクシャヤ) といい、これは死という最期の一撃の直前に現われる肉体の縮小を指します。肉体は誕生し、発育し、留まり、他の肉体を作り、減少し、そして消滅します。しかし愚かな人々は、いつかは消滅する体を不滅にしようとし、財産、子ども、社会、国などが自分を守ってくれる、と考えています。そのような愚かな考えに支えられた彼らは、はかない体を捨てて新しい体に入り、そして新しい社会、友人関係、愛情関係を築き、ふたたびその関係を捨てる羽目に陥ることをすっかり忘れ、束の間の仕事に追われています。自分の永遠な正体を忘れ、その場限りの仕事のために必死に働き、一番大切な義務を忘れ去ってしまった愚かな状態にあるのです。神聖な気質をそなえた人物やヴィドゥラのような聖者は、そのような愚かな人々に向かって現実を説いて気づかせようとするのですが、人々はサードゥや聖者を社会の寄生虫のように考え、彼らの神聖な言葉に耳を傾けることを拒否します。見せかけのサードゥや、物欲を満たしてくれるいかにも聖者風の間人たちは歓迎するというのに。ヴィドゥラはドゥリタラーシュトラの間違った感情を喜ばせるような聖者ではありません。現実をありのままに正しく指摘していたのであり、その話に耳を傾けることで私たちは大きな不幸から救われるのです。

第23節

अहो महीयसी जन्तोर्जीविताशा यथा भवान् ।
भीमापवर्जितं पिण्डमादत्ते गृहपालवत् ॥ २३ ॥

*aho mahīyasī jantor
jīvitāśā yathā bhavān
bhīmāpavarjitam piṇḍam
ādatte gr̥ha-pālavat*

aho—ああ; *mahīyasī*—力強い; *jantor̥*—生命体達の; *jīvita-āśā*—生活への希望; *yathā*—〜と同じの; *bhavān*—あなたは〜である; *bhīma*—ビーマセーナ (ユディシュティラの兄弟) の;

apavarjitam—残り物; pindam—食べ物; ādatte—～に食べられた; grha-pāla-vat—飼われている犬のように。

ああ、生き続けようとする生命体の望みのなんと強いことか。まさに、あなたは飼い犬のように生きながらえ、ビーマが食べ残した食物を食べているのです。

要旨解説

サードゥたるもの、王や裕福な人々に取りいって快適な生活を保証してもらおうなどと思ふべきではありません。サードゥは人生の赤裸々な真理を世帯者に説き、彼らが物質存在という危険な生涯に目覚めるよう導かなくてはなりません。ドゥリタラーシュトラは、家庭生活に執着している高齢者の典型と言えます。無一文になったというのに、パーンダヴァ兄弟の家で快適に暮らそうとしていました。兄弟たちのなかで特にビーマの名前が挙げられています。これは、ドゥリタラーシュトラの息子たちのなかでも筆頭のドゥリヨーダナとドゥフシャーサナという悪名高く、また極悪非道な行ないをし、そして特にドゥリヨーダナには可愛い存在だった二人を、ビーマが殺していたからです。なぜドゥリタラーシュトラはパーンダヴァ兄弟の家に住んでいたのでしょうか。それは、たとえそれほどの屈辱を味わおうとも、ただ快適に暮らし続けたいという思いゆえのことでした。だからこそヴィドゥラは、生き続けようとする感情の強さに驚いたのです。どうしても生きたいと思うこの感情は、生命体は永遠に生きようとする生き物であり、肉体という住み家を変えたくないと思っていることを示しています。愚かな人は、一定の拘束期間に耐えるために特定の肉体存在期間が与えられることも、そして無数の誕生と死を繰り返したあとに人間の体が与えられ、それは自己を悟ったふるさとへ、神の元に帰る絶好の機会であることも知りません。しかしドゥリタラーシュトラのような人々は、物事を正しく見ることができないために、利益も興味も満たされる快適な生活環境を得るために計画を立てようとします。ドゥリタラーシュトラは盲目で、どれほどの逆境にあっても快適に暮らす希望を抱いていました。ヴィドゥラのようなサードゥは、そのような盲目の人々を目覚めさせ、彼らを永遠な生活ができるふるさとへ、神の元へ返すために存在しています。ひとたびその地へ戻った人は、苦しみに満ちたこの物質界に戻りたいとは思いません。マハートマー・ヴィドゥラのようなサードゥにどれほど重大な責任が託されているのか、容易に想像できます。

第24節

अग्निर्मृष्टो दत्तश्च गरो दाराश्च दूषिताः ।
हतं क्षेत्रं धनं येषां तद्वत्तैरसुभिः कियत् ॥ २४ ॥

agnir nisṛṣṭo dattaś ca
garo dārās ca dūṣitāḥ
hṛtam kṣetram dhanam yeṣām
tad-dattair asubhiḥ kiyat

agnih—火; nisṛṣṭah—付けた; dattah—与えられた; ca—そして; garah—毒; dārāḥ—結婚した妻; ca—そして; dūṣitāḥ—侮辱した; hṛtam—強奪した; kṣetram—王国; dhanam—富; yeṣām—彼らのもの; tat—彼らの; dattaiḥ—～に与えられた; asubhiḥ—暮らしている; kiyat—不必要である。

放火や毒で殺そうとした相手の情けにすがって生きるというみじめな生活をする必要がどこにありましょう。あなたは、彼らの妻の一人を侮辱し、彼らの王国や富を強奪したのです。

要旨解説

ヴァルナーシュラマ宗教の制度は、生活の一部を、完全な自己の悟りと人間生活における解放達成のために使うよう用意されています。それがヴェーダに定められた生活区分ですが、ドゥリタラーシュトラのような人々は、見る影もない老年期に及んでも、敵の情けを受けながらみじめな生活をしてでも家庭にとどまりたいと考えます。5,000年前に一人のドゥリタラーシュトラが生きていました。ところがいまではどの家にもドゥリタラーシュトラがいます。特に政治家は、無慈悲な死や敵対する政治勢力に殺されたり引きずり下ろされたりしなければ、政治活動から身を引こうとしません。人間の生活の最後の最後まで家族生活にしがみつくなのは、もっともひどく墮落した暮らしであり、ヴィドゥラがそのようなドゥリタラーシュトラたちに教えを授けるのは、現代にも必要なことなのです。

第25節

तस्यापि तव देहोऽयं कृपणस्य जिजीविषोः ।
परैत्यनिच्छतो जीर्णो जरया वाससी इव ॥ २५ ॥

tasyāpi tava deho 'yam
kṛpaṇasya jijīviṣoḥ
paraity anicchato jīrṇo
jarayā vāsasī iva

tasya—これ; api—～にもかかわらず; tava—あなたの; dehaḥ—肉体; ayam—これ;

kr̥paṇasya—けちな; *jīviṣoḥ*—生活を望むあなたの; *paraiti*—縮小するだろう; *anicchataḥ*—好まなくても; *jīrṇaḥ*—劣化して; *jarayā*—古い; *vāsasī*—衣服; *iva*—～のように。

たとえあなたが死を望まずとも、名誉と威信を犠牲にして生きながらえようと望んでも、そのみすばらしい肉体は、古い衣服のように確実に縮み、そして衰えていくのです。

要旨解説

この節の *kr̥paṇasya jīviṣoḥ* (クリパナッシャ ジジーヴィショーホ) は重要です。2種類の人間がいます。一方はクリパナ、片方はブラーフマナです。クリパナ・けちな人間は、自分の肉体を見きわめることができませんが、ブラーフマナは自分自身と肉体を正しく見きわめています。クリパナは自分の体を間違っって評価しているため、最大限の力を駆使して感覚満足を楽しもうとしており、老人になっても、医療や他の方法に頼って若返りたいと思っています。ドゥリタラーシュトラはここでクリパナと呼ばれていますが、それは、自分の肉体を正しく見ずに、是が非でも生き続けたい、と思っているからです。ヴィドゥラは、定められた寿命より長くは生きられないこと、そして死ぬ準備をすべきことを教えてドゥリタラーシュトラの目を開けようとしています。死は避けられないのですから、自尊心をかなぐり捨ててまで生きようとしてなんになるのでしょうか？ 死を覚悟で、正しい道を選ぶべきなのです。人間生活は、物質存在にあるすべての苦しみを終わらせるためにあり、その望ましいゴールに到達するために人生を調整しなくてはなりません。ドゥリタラーシュトラは間違っった人生の観念を持っていたために、自分に用意された活力の80パーセントはすでに使いはたしているのですから、無駄に過ごしてきた人生の残りの日々を窮極の善のために使うべきです。無駄に使われたそのような人生は「けちな生涯」と呼ばれます。人間生活の利点を正しく活用しなかったからです。けちな人間がヴィドゥラのような自己を悟った人物に巡り会うのはまさに幸運にほかならず、その教えを授かることで、物質存在の闇を取り除くことができます。

第26節

गतस्वार्थमिमं देहं विरक्तो मुक्तबन्धनः ।
अविज्ञातगतिर्जह्यात् स वै धीर उदाहृतः ॥ २६ ॥

gata-svārtham imam deham
virakto mukta-bandhanaḥ
avijñāta-gatir jahyāt
sa vai dhīra udāhṛtaḥ

gata-sva-artham—適切に活用されることなく; *imam*—この; *deham*—物質の体; *viraktaḥ*—無関心; *mukta*—自由で; *bandhanaḥ*—すべての義務から; *avijñāta-gatiḥ*—知られていない目的地; *jahyāt*—この体を捨てなくてはならない; *sah*—そのような人物; *vai*—確かに; *dhiraḥ*—乱されていない; *udāhṛtaḥ*—そのように言われている。

人里離れ、そして知らない場所に行き、すべての義務から解放され、無用になった肉体を捨て去る者は、心乱されない者、と呼ばれます。

要旨解説

ゴウディーヤ・ヴァイシュナヴァの偉大な献愛者、そしてアーチャーリヤであるナローツタマ・ダーサ・タークラが詠っています。「主よ。私は生涯をまったく無駄に過ごしてきました。人間の体を得たというのに、あなたへの奉仕をこれまで無視してきたため、自分から毒を飲んできたのです」。言い換えれば、人間の体は特に主への献愛奉仕の知識を高めるためにあるということであり、奉仕をしない一生は不安と苦しみに満ちたものになります。ですから、人間として必要な文化的な活動をせずに生涯を無駄にしてしまった人は、友人や親族に知られることなく家を出て、家族、社会、国などへの義務から解放され、どこでどのように死と向き合ったのか知られないように、だれも知らない場所で肉体を捨てるのが勧められています。*Dhira* (ディーラ) は、乱されても当然と思われる状況でも心乱されない人物を指します。妻や子どもへの愛情に縛られた関係のために、快適な家族生活を捨てることは至難の業です。自己の悟りは、そのような家族に対する過度の愛着のために妨げられることがあります。そのような関係をきっぱり忘れることのできる人は乱されない者、ディーラ、と呼ばれます。しかしこれは、挫折感を味わった生活ゆえの放棄の道ですが、そのような放棄の安定は、本物の聖者や自己を悟った魂との交流をとおして初めて可能になり、その結果、主への愛情あふれる献愛奉仕に励むことができるようになります。主の蓮華の御足への誠実な服従は、奉仕という超越的な意識を目覚めさせることで実現できます。さらにこれは、主の純粋な献愛者との交流をとおして可能になります。ドウリタラーシュトラは、挫折の生涯からの解放を授けてくれる兄弟に恵まれた幸運な境地にいたのです。

第27節

यः स्वकात्परतो वेह जातनिर्वेद आत्मवान् ।
हृदि कृत्वा हरिं गेहात्प्रव्रजेत्स नरोत्तमः ॥ २७ ॥

*yaḥ svakāt parato veha
jāta-nirveda ātmavān*

*hṛdi kṛtvā harim gehāt
pravrajat sa narottamaḥ*

yaḥ—～である者は誰でも; *svakāt*—自らの目覚めによって; *parataḥ vā*—あるいは他の人から聞くことで; *iha*—ここ物質界で; *jāta*—～になる; *nirvedaḥ*—物質的終着に無関心な; *ātmavān*—意識; *hṛdi*—心臓の中で; *kṛtvā*—～によって取られて; *harim*—人格主神; *gehāt*—家から; *pravrajat*—立ち去る; *saḥ*—彼は～である; *nara-uttamaḥ*—一流の人間。

この物質界の虚偽と苦しみを、自分で、あるいは人から聞いて目覚め、そして理解し、家を出て、心臓の中に住む最高人格主神に完全に頼る人物は疑いなく一流と呼ばれるにふさわしい。

要旨解説

超越主義者には3種類います。(1) ディーラ。家族と離れていても乱されない者、(2) 挫折感ゆえに放棄階級、すなわちサンニャーシーとなった者、(3) 聞いて唱えることで神の意識を目覚めさせ、心臓の中に住む人格主神に完全に頼って家庭から離れる誠実な主の献愛者。大切なことは、物質界で挫折感を味わった結果としての放棄階級生活は、自己を悟る道への踏み石になるかもしれませんが、解放の道の真の完成は、パラマートマーとしてだれもの心臓の中に住む最高人格主神に完全に身を委ねる修練を重ねたあとに達成できる、という事実です。家を離れて密林で一人暮らすことはできるかもしれませんが、意思堅固な献愛者は、自分は一人ではないことをよく知っています。最高人格主神は献愛者と共にいますし、どのような苦境にあっても主は誠実な献愛者を守ることができます。ですから、私たちは自宅で献愛奉仕を修練すればいいのであり、純粋な献愛者との交流をとおして、聖なる名前、主の資質、姿、娯楽、主にまつわる人々などについて唱えたり聞いたりすることで、その修練が、目標を目指す誠実さに応じて神の意識を目覚めさせる助けになります。そのような献愛奉仕をしているのに物質的な恩恵を求めている人は、たとえ主が心臓の中にも、最高人格主神に身を委ねることはできません。また主は、物質的な利益のために主を崇拜する人々を導くことはありません。物質的な献愛者は、物質的な恩恵を主から授かるかもしれませんが、上記のような、一流の人間の段階に到達することはできません。世界の歴史には、そのような誠実な献愛者の模範となる人物たちが、特にインドにはたくさん存在しており、彼らは自己の悟りの道の案内人です。マハートマー・ヴィドゥラはそのような主の偉大な献愛者の一人であり、自己の悟りを求めて、私たちはこぞってその蓮華の足跡に従わなくてはなりません。

第28節

अथोदीचीं दिशं यातु स्वैरज्ञातगतिर्भवान् ।
इतोऽर्वाक्प्रायशः कालः पुंसां गुणविकर्षणः ॥ २८ ॥

*athodīcīm diśam yātu
svair ajñāta-gatir bhavān
ito 'rvāk prāyaśaḥ kālaḥ
pumsām guṇa-vikarṣaṇaḥ*

atha—ゆえに; *udicīm*—北側; *diśam*—方向; *yātu*—どうか立ち去ってください; *svaiḥ*—あなたの親族によって; *ajñāta*—知られずに; *gatiḥ*—動き; *bhavān*—あなた自身の; *itaḥ*—この後; *arvāk*—到来するだろう; *prāyaśaḥ*—一般的に; *kālaḥ*—時; *pumsām*—人間の; *guṇa*—質; *vikarṣaṇaḥ*—減少している。

だからこそますます家に家を出て、親族に知られることなく北に向かって立ち去ってください。なぜなら、人間の優れた気質を衰えさせる時代がすぐそこに近づいているからです。

要旨解説

ディーラになることによって、あるいは親族に伝えることなく永遠に家から離れることで挫折の生涯を償うことができ、ヴィドゥラは兄にすぐこの方法に従うよう助言しました。カリ時代が目の前に迫っていたからです。条件づけられた魂は物質とのかかわりのためにすでに墮落しているのですが、カリ・ユガでは人の優れた気質は最低の段階にまで墮落していきます。彼はカリ・ユガが到来する前に家を出るよう助言を受けましたが、それは、ヴィドゥラが説いた人生の真実に関する価値ある教えによって作り出された雰囲気は、そのカリ・ユガの影響のために消え去ろうとしていたからです。至高主シュリー・クリシュナに完全に身を委ねた一流の人間であるナローッタマ (*narottama*) になることは、一般人にできることではありません。『バガヴァッド・ギーター』(7章・28節)では、すべての悪業の穢れから完全に離れている人物だけが至高主シュリー・クリシュナ、人格主神に身を任せることができる、とされています。ドゥリタラーシュトラはヴィドゥラから、まずディーラになり、そして可能であれば、サンニャーシー、あるいはナローッタマになるという助言を受けました。自己の悟りの進路において根気強く努力することは、私たちにとって、ディーラの段階からナローッタマの状態に高められる助けになります。ディーラの段階は、ヨーガ法を長期間修練したあとに達成できるものですが、ヴィドゥラの恩寵を授ければ、ディーラの段階に高められる方法を受け入れる意思だけで、すぐにサンニャーサの準備段階であるその境

地に到達できます。サンニャーサの段階は、パラマハンサ、すなわち主の一流の献愛者の準備段階です。

第 29 節

एवं राजा विदुरेणानुजेन
प्रज्ञाचक्षुर्बोधित आजमीढः ।
छित्त्वा स्वेषु स्नेहपाशान्द्रढिम्नो
निश्चक्राम भ्रातृसन्दर्शिताध्वा ॥ २९ ॥

*evam rājā vidureṇānujena
prajñā-cakṣur bodhita ājamīḍhaḥ
chittvā sveṣu sneha-pāśān draḍhimno
niścakrāma bhrāṭṛ-sandarśitādhvā*

evam—こうして; *rājā*—ドゥリタラーシュトラ王; *vidureṇa anujena*—弟のヴィドゥラによって; *prajñā*—内省的知識; *cakṣuḥ*—目; *bodhitaḥ*—理解して; *ājamīḍhaḥ*—アジャミーダの家系の子孫であるドゥリタラーシュトラ; *chittvā*—断ち切ることで; *sveṣu*—親族に関して; *sneha-pāśān*—愛情という頑丈な網; *draḍhimnaḥ*—堅固さゆえの; *niścakrāma*—出ていった; *bhrāṭṛ*—兄弟によって; *sandarśita*—～の方角; *adhvā*—解放の道。

こうして、アジャミーダの家系の子孫であるマハーラージャ・ドゥリタラーシュトラは、内省的な知識（プラギャー）をとおしてすべてを深く理解し、堅い決意とともに家族への愛着という頑丈な網を打ち壊した。すぐに宮殿を出た彼は、弟ヴィドゥラに指示されたように、解放に向かって旅だっていた。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』の根本的な教えを説く偉大な布教徒である主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは、主の純粋な献愛者、すなわちサードゥとの交流の重要性を強調しています。主は、純粋な献愛者との交流は、たとえ束の間であってもあらゆる完成をもたらしてくれる、と言っています。私も、自分の生涯でそのことを実際に体験したことをなんの恥じらいもなく認めることができます。尊師シュリーマドゥ・バクティシッダーンダ・サラスヴァティー・ゴースヴァーミー・マハーラージャとの初めての数分間の出会いに恩寵を授かっていなければ、『シュリーマド・バーガヴァタム』を英語で説明するという重要な使命を受け入れることなどありえなかつたはずで。その好機に師に出会っていなければ、私は事業の勝利者になっていたかもしれませんが、解放の道を歩くことも、尊師の教え

に導かれて主への真実の奉仕をすることもできなかったことでしょう。そしてこの節でも、ヴィドゥラのドゥリタラーシュトラとの交流で起こった別の例を見ることができます。マハーラージャ・ドゥリタラーシュトラは、政治・経済・家族への執着に関連する物質的な魅力にきつく縛られており、計画して得られる成功を手に入れるためにあらゆる力を使ってなんでもしてきましたが、物質的活動という面から見れば、その計画は最初から最後まで挫折の連続でした。それでも、そのような不成功の生涯にもかかわらず、サードゥという典型的な象徴である主の純粋な献愛者の力強い教えによって、自己の悟りにおける全成功のなかでも最大の成功を手に入れることができました。だからこそ経典は私たちに勧めています、すべてのかかわりを捨ててサードゥとだけ交流すべきであり、そうすることで物質界の幻の愛情という束縛を壊すサードゥの教えを聞く機会を得ることができる、と。物質界が巨大な幻想であることは事実です——この世にあるものすべてが明白な現実に見えても、次の瞬間には、泡立つ海の泡や空の雲のように、跡形もなく消えうせてしまうからです。空に浮かぶ雲はまぎれもない事実です。雨を降らせるからです。その雨によって、植物が一時的に姿を現わしますが、やがてすべて——雲も、雨も、緑の植物も——その姿を消していきます。しかし空は残り、さまざまな空や発光体は永遠に残ります。同じように、空と比較される絶対真理も永遠に残り、一時的な雲のような幻想は現われ、そして消えていきます。愚かな生命体は、一時的な雲に心奪われますが、知性ある人々は、永遠な空と、その多様性に関心を寄せます。

第30節

पतिं प्रयान्तं सुबलस्य पुत्री
 पतिव्रता चानुजगाम साध्वी ।
 हिमालयं न्यस्तदण्डप्रहर्षं
 मनस्विनामिव सत्सम्प्रहारः ॥ ३० ॥

*patim prayāntam subalasya putrī
 pati-vratā cānujagāma sādhvī
 himālayam nyasta-daṇḍa-praharṣam
 manasvinām iva sat-samprahāraḥ*

patim—彼女の夫; *prayāntam*—家を離れている間; *subalasya*—スバラ王の; *putrī*—その価値ある娘; *pati-vratā*—夫に献身的な; *ca*—もまた; *anujagāma*—従った; *sādhvī*—貞節な者; *himālayam*—ヒマラヤ山脈に向けて; *nyasta-daṇḍa*—放棄階級の棒を受け入れた者; *praharṣam*—喜びの対象; *manasvinām*—偉大な戦士の; *iva*—～のような; *sat*—正当な; *samprahāraḥ*—痛烈な攻撃。

カンダハル（ガンダーラ）のスバラ王の娘であるガンダーリーは、心穏やかで貞節な女性であり、ヒマラヤに向かおうとしていた夫を見て、その跡に従った。ヒマラヤこそ、敵の痛烈な攻撃を受け入れた戦士のように、放棄階級の棒を受け入れた者にとって喜びとも言える場所である。

要旨解説

スバラ王の娘サウバリニー、すなわちガンダーリーは、夫に献身的に仕える理想的な妻でした。ヴェーダ文明では、特に貞節で献身的な妻について説明されていますが、なかでもガンダーリーは、歴史に数多く登場するそのような女性の一人です。ラクシュミーギー・シーターデーヴィーも偉大な王の娘でしたが、夫の主ラーマチャンドラに従って森に入っていました。ガンダーリーは女性の立場上、自分の、あるいは父親の家にとどまることもできたのですが、貞節で心穏やかな女性として、ためらうことなく夫に従いました。放棄階級の生活のための教えがヴィドゥラからドウリタラーシュトラに授けられ、ガンダーリーは夫の横でその教えを聞いていました。しかしドウリタラーシュトラはすでにその時、戦場であらゆる危険に直面する偉大な戦士のように堅い決心を抱いていたため、自分についてくるよう告げたわけではありませんでした。妻や親族に対する魅力はすでになく、一人で旅立つことを決めていましたが、いっぽうガンダーリーは貞節な女性として、最後の瞬間まで夫に従うつもりでいました。マハーラージャ・ドウリタラーシュトラはヴァーナプラスタの階級を受け入れ、その段階で、妻は自発的な召使いとして夫に従うことが許されるのですが、サンニャーサ階級では、妻は以前の夫といっしょにいることは許されません。サンニャーシーは法律上では死んだ人間とされ、妻も、以前の夫とは関係がなくなった未亡人になります。マハーラージャ・ドウリタラーシュトラは、その忠実な妻を拒むことはしませんでしたし、彼女も危険を覚悟で夫に従ったのでした。

サンニャーシーは放棄階級の印である棒を持っています。サンニャーシーには2種類います。シュリーパーダ・シャンカラチャーリヤを代表とするマーヤーヴァーディー哲学に従う人々は、1本の棒（エーカ・ダンダ）だけを受けいれますが、ヴァイシュナヴァ派の哲学を受け入れる人々は3本の棒を合わせた1本の棒（トゥリ・ダンダ）を受けいれます。マーヤーヴァーディーのサンニャーシーはエーカダンディ・スヴァーミー、そしてヴァイシュナヴァ・サンニャーシーはトゥリダンディ・スヴァーミーという名前で知られ、さらに、マーヤーヴァーディー哲学者と区別するために明確にはトゥリダンディ・スヴァーミーと呼ばれます。ほとんどのエーカダンディ・スヴァーミーはヒマラヤを好むのですが、ヴァイシュナヴァ・サンニャーシーはヴリンダーヴァナやプリーを好みます。ヴァイシュナヴァ・サンニャーシーはナローツタマたちですが、マーヤーヴァーディー・サンニャーシーはディーラです。マハーラージャ・ドウリタラーシュトラはディーラに従うよう助言を受けました。それ

は、その歳になってナローツタマになるのはあまりにも難しいことだったからです。

第31節

अजातशत्रुः कृतमैत्रो हुताग्नि-
विप्रान् नत्वा तिलगोभूमिरुक्मैः ।
गृहं प्रविष्टो गुरुवन्दनाय
न चापश्यत्पितरौ सौबलीं च ॥ ३१ ॥

*ajāta-śatruḥ kṛta-maitro hutāgnir
viprān natvā tila-go-bhūmi-rukmaiḥ
gṛham praviṣṭo guru-vandanāya
na cāpaśyat pitarau saubalīm ca*

ajāta—決して生まれない; *śatruḥ*—敵; *kṛta*—執行して; *maitraḥ*—半神を崇拝している; *huta-agniḥ*—そして火の中に燃料を捧げている; *viprān*—ブラーフマナ達; *natvā*—敬意を表している; *tila-go-bhūmi-rukmaiḥ*—穀物、牛、土地、金と共に; *gṛham*—宮殿の中で; *praviṣṭaḥ*—～の中に入っている; *guru-vandanāya*—年長の家族達に敬意を表すために; *na*—～しなかった; *ca*—もまた; *apaśyat*—見る; *pitarau*—彼の叔父; *saubalīm*—ガンダーリー; *ca*—もまた。

敵を作ることのないマハーラージャ・ユディシュティラは、太陽神に火の儀式を捧げたり、穀物、土地、金をブラーフマナたちに捧げたりすることで毎朝の義務を執行していた。この日も、年長者たちに敬意を捧げるために宮殿に入っていた。しかし、叔父も、そしてスバラ王の娘である叔母たちの姿も見えなかった。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラはひじょうに敬虔な王でした。世帯者に定められた敬虔な義務を毎日行なっていたからです。世帯者は朝早く起きなくてはならず、そして沐浴したあと、自宅に祭った神像に向かって、祈りを捧げ、神聖な火のなかに燃料を捧げ、ブラーフマナたちに土地、牛、穀物、金などを提供し、そして最後に家族の年長者に敬意とお辞儀を捧げることで敬意を表さなくてはなりません。シャーストラが定める教えを修練する心の準備ができていなければ、書物の知識だけで善人になることはできません。現代の世帯者はさまざまな生活スタイルを営んでいますが、上記のような清潔や浄化のための修練などとはまったく関係ない生活、つまり遅く起き、起きたあとはベッドでお茶を飲んだりする生活を続けています。子どもたちも両親と同じことをしますから、世代全体が徐々に地獄に向かっ

て転落していきます。サードゥと交流する機会がなければ、彼らに良いことが起こる希望はありません。ドゥリタラーシュトラのように物質主義者の人々は、ヴィドゥラのような聖者から教えを授かることで、現代生活の悪影響から浄化されます。

しかし、マハーラージャ・ユディシュティラは、宮殿のなかで二人の叔父、すなわちドゥリタラーシュトラヴィドゥラも、さらにスバラ王の娘ガンダーリーを見つけることができませんでした。そのため、彼らをさがすためにドゥリタラーシュトラの秘書だったサンジャヤに行方を尋ねました。

第32節

तत्र सञ्जयमासीनं पप्रच्छोद्विग्रमानसः ।
गावल्गणे क्व नस्तातो वृद्धो हीनश्च नेत्रयोः ॥ ३२ ॥

tatra sañjayam āsīnam
papracchodvigna-mānasah
gāvalgaṇe kva nas tāto
vṛddho hīnaś ca netrayoḥ

tatra—そこに; sañjayam—サンジャヤに; āsīnam—座って; papraccha—彼は～に尋ねた; udvigna-mānasah—不安に駆られて; gāvalgaṇe—ガヴァルガナの子、サンジャヤ; kva—どこにいるのか; naḥ—私達の; tātaḥ—叔父; vṛddhaḥ—年老いた; hīnaś ca—そして～を奪われた; netrayoḥ—目。

気が気でないマハーラージャ・ユディシュティラは、そこに座っていたサンジャヤに尋ねた。「サンジャヤ様。盲目で、年老いた叔父様たちはどこにおられるのでしょうか」

第33節

अम्बा च हतपुत्रार्ता पितृव्यः क्व गतः सुहृत् ।
अपि मय्यकृतप्रज्ञे हतबन्धुः स भार्यया ।
आशंसमानः शमलं ग्रायां दुःखितोऽपतत् ॥ ३३ ॥

ambā ca hata-putrārtā
pitṛvyaḥ kva gataḥ suhṛt
api mayy akṛta-prajñe
hata-bandhuḥ sa bhāryayā

*āśamsamānaḥ śamalam
gaṅgāyām duḥkhito 'patat*

ambā—母なる叔母; *ca*—そして; *hata-putrā*—息子たち全員を失った者; *ārtā*—苦境の中にあって; *pitṛvyaḥ*—叔父のヴィドゥラ; *kva*—どこに; *gataḥ*—行ってしまった; *suhṛt*—幸せを望む者; *api*—~かどうか; *mayi*—私に; *akṛta-prajñe*—恩知らずの; *hata-bandhuḥ*—自分の息子全員を失った者; *sah*—ドウリタラーシュトラ; *bhāryayā*—彼の妻と; *āśamsamānaḥ*—疑いの心で; *śamalam*—冒涇; *gaṅgāyām*—ガンジス川の水の中で; *duḥkhitaḥ*—苦境の中で; *apatat*—転落した。

私の幸福を願うヴィドゥラ叔父様はどこに、そしてご子息を失われて失意の底におられる母なるガンダーリーはどこにおられるのでしょうか。ドウリタラーシュトラ叔父様も、息子と孫すべて失われ、屈辱を感じられていたことでしょうか。私は間違いなく恩知らずの人間です。だから叔父様は、私の冒涇を深刻にとられ、奥様とともにガンジス川に身を投げられてしまったのではないのでしょうか。

要旨解説

パーンダヴァ兄弟、特にマハーラージャ・ユディシュティラとアルジュナは、クルクシェートラの戦いの悪影響を予想していたため、戦うことを拒みました。戦いは主の意志でなされたのですが、家族の悲しみという結果は、その予想どおり現実となって起こりました。マハーラージャ・ユディシュティラは、叔父のドウリタラーシュトラと叔母のガンダーリーの苦しみをいつも意識していましたから、高齢で苦境にあった二人を可能なかぎり世話したいと思っていました。そのため、宮殿からいなくなったことに気づいたとき、二人はガンジス川に身を投げてしまったのでは、という疑惑の念に襲われたのです。パーンダヴァ兄弟が父親をなくしたとき、マハーラージャ・ドウリタラーシュトラは彼らが宮殿で暮らせるよう便宜をはかったのですが、マハーラージャ・ユディシュティラは「その見返りに私はクルクシェートラの戦いであの方の息子たちを殺してしまいました。私ほど恩知らずの人間はいない」と考えたのです。敬虔なマハーラージャ・ユディシュティラは、避けられなかった自分の行為だけを考え、叔父やその仲間たちの悪事を考えませんでした。主の意志によって、ドウリタラーシュトラは自分の悪事のために苦しんでいたのですが、マハーラージャ・ユディシュティラは避けられなかった自分の悪事のことしか考えていませんでした。これが善人の、あるいは主の献愛者の気質です。献愛者は決して他人の欠点を見ません。自分のいたらなさを見つめ、できるかぎり自分を正そうとするのです。

第34節

पितर्युपरते पाण्डौ सर्वान्नः सुहृदः शिशून् ।
अरक्षतां व्यसनतः पितृव्यौ क्व गतावितः ॥ ३४ ॥

pitary uparate pāṇḍau
sarvān naḥ suhṛdaḥ śiśūn
pitṛvyau kva gatāv itaḥ
arakṣatām vyasanataḥ

pitari—私の父親に; *uparate*—倒れている; *pāṇḍau*—マハーラーजा・パンドウ; *sarvān*—すべての; *naḥ*—私達の; *suhṛdaḥ*—幸福を願う者達; *śiśūn*—小さな子ども達; *arakṣatām*—守った; *vyasanataḥ*—あらゆる種類の危険から; *pitṛvyau*—叔父達; *kva*—どこに; *gatau*—出発して; *itaḥ*—この場所から。

父パンドウが倒れたとき、私たち兄弟はみな幼い子どもたちでしたが、お二人の叔父は、私たちをあらゆる悲劇から守ってくださいました。いつも私たちの幸運を願っておられました。ああ、この宮殿からお二人はいったいどこへ行ってしまわれたのでしょうか。

第35節

सूत उवाच

कृपया स्नेहवैचा व्यात्सूतो विरहकर्षितः ।
आत्मेश्वरमचक्षणो न प्रत्याहातिपीडितः ॥ ३५ ॥

sūta uvāca
kṛpayā sneha-vaiklavyāt
sūto viraha-karṣitaḥ
ātmeśvaram acakṣāṇo
na pratyāhātipīḍitaḥ

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *kṛpayā*—十分な同情心; *sneha-vaiklavyāt*—深い愛情ゆえに生じた心理的混乱; *sūtaḥ*—サンジャヤ; *viraha-karṣitaḥ*—別れによる悲しみ; *ātma-īśvaram*—彼の主人; *acakṣāṇaḥ*—見えないことで; *na*—～しなかった; *pratyāha*—答えた; *ati-pīḍitaḥ*—あまりの悲しみに。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「サンジャヤは哀れみと心の動揺に襲われ、主人ド

ウリタラーシュトラの姿が見えないことを嘆き、マハーラージャ・ユディシュティラにまともな返事をする事ができなかった」

要旨解説

サンジャヤは、長くマハーラージャ・ドゥリタラーシュトラに側近として仕えていた人物で、間近に主人の生涯を見てきました。そして最後に、ドゥリタラーシュトラが自分の知らぬ間に宮殿を去っていったことに、彼は計り知れない悲しみに襲われます。ドゥリタラーシュトラには深い同情心を抱いていました。クルクシェートラの戦いが終わり、ドゥリタラーシュトラ王は、臣下や財産などすべてを失い、あげくに王も女王も失望の極みのうちに家を去らなくてはならなかったと考えたからです。サンジャヤは彼なりに状況を判断しようとしていました。ヴィドゥラの教えでドゥリタラーシュトラが目覚めたこと、また彼が家庭という深い闇から出たあとにより素晴らしい生活を目ざして喜び勇んで宮殿を跡にした、という事実を知らなかったからです。いまの生活を捨て、そのあとにもっと素晴らしい生活が待っていることを確信していなければ、サンニャシーの格好だけをしようと、家庭にとどまっていなくても、放棄階級の生活を続けることはできません。

第36節

विमृज्याश्रूणि पाणिभ्यां विष्टभ्यात्मानमात्मना ।
अजातशत्रुं प्रत्यूचे प्रभोः पादावनुस्मरन् ॥ ३६ ॥

*vimṛjyāśrūṇi pāṇibhyām
viṣṭabhyātmānam ātmanā
ajāta-śatrum pratyūce
prabhoḥ pādāv anusmaran*

vimṛjya—塗っている; *aśrūṇi*—目からこぼれ落ちる涙; *pāṇibhyām*—手で; *viṣṭabhya*—置かれて; *ātmānam*—その心; *ātmanā*—知性によって; *ajāta-śatrum*—マハーラージャ・ユディシュティラに; *pratyūce*—答え始めた; *prabhoḥ*—自分の主人の; *pādau*—足; *anusmaran*—～について考えている。

サンジャヤは最初、知性をつかって自分の心をゆっくりとなだめ、涙を拭きながら、主人、ドゥリタラーシュトラの御足を思いながら、マハーラージャ・ユディシュティラに答え始めた。

第 37 節

सञ्जय उवाच

नाहं वेद व्यवसितं पित्रोर्वः कुलनन्दन ।
गान्धार्या वा महाबाहो मुषितोऽस्मि महात्मभिः ॥ ३७ ॥

sañjaya uvāca

nāham veda vyavasitam

pitror vaḥ kula-nandana

gāndhāryā vā mahā-bāho

muṣito 'smi mahātmabhiḥ

sañjayaḥ uvāca—サンジャヤが言った; *na*—～ではない; *aham*—私; *veda*—知っている; *vyavasitam*—決意; *pitroḥ*—あなたの叔父の; *vaḥ*—あなたの; *kula-nandana*—クル王家の子孫よ; *gāndhāryāḥ*—ガンダーリーの; *vā*—あるいは; *mahā-bāho*—偉大な王よ; *muṣitaḥ*—騙されて; *asmi*—私は～だった; *mahā-ātmabhiḥ*—その偉大な魂達によって。

サンジャヤが言った。「クル王家の子孫よ。私は、あなたの二人の叔父とガンダーリーがどのような決意を持っておられたのか知らない。王よ。私はあの偉大な魂たちに騙されてしまったのだ」

要旨解説

偉大な魂たちが人を欺く、と聞けば、だれでも驚いてしまうものですが、偉大な魂がある高尚な目的のために人を騙すことは事実です。主クリシュナもユディシュティラに、ドロナーチャーリヤの前で嘘をつくよう助言しており、それはやはり最適な目的のためでした。主がそのことを望んだ、だからそれは正しい目的だったのです。主の満足を考える人が正しい人物の基準であり、人生の最高完成は自分に定められた義務をとおして主を満足させることにあります。それが『バガヴァッド・ギーター』と『シュリーマド・バーガヴァタム』*の見解であり、ドゥリタラーシュトラとヴィドゥラ、そして二人に従ったガンダーリーたちは、彼らの決意を、ドゥリタラーシュトラに側近として仕えていたサンジャヤに打ち明けることをしませんでした。サンジャヤは、自分の意見を聞かなければドゥリタラーシュトラ王はなにもできない方だと考えていました。しかし、ドゥリタラーシュトラが家を出ていくことはひじょうに秘密裏になされたことで、サンジャヤにさえ知らされませんでした。サナータナ・ゴースヴァーミーも、シュリー・チャイタンニャ・マハープラブに会うために、牢獄の門番をうまく言いくるめ、また同じようにラグナータ・ダーサ・ゴースヴァーミーも

主を満足させるために、司祭を騙して家を出ていきました。主を満足させるためなら、絶対真理者と関係しているため、どのようなことでも正しいことになります。私も『シュリーマド・バーガヴァタム』の奉仕をするために家族を欺いて家を出ていきました。そのような騙し方は、優れた目的のために必要なことであり、だれもそのような超越的な欺瞞によって失うものはありません。

*yataḥ pravṛttir bhūtānām
yena sarvam idaṁ tatam
sva-karmaṇā tam abhyarcya
siddhiṁ vindati mānavaḥ
(Bg. 18.46)

*ataḥ pumbhir dvija-śreṣṭhā
varṇāśrama-vibhāgaśaḥ
svanuṣṭhitasya dharmasya
saṁsiddhir hari-toṣaṇam
(Bhāg. 1.2.13)

第 3 8 節

अथाजगाम भगवान् नारदः सहनुम्बुरुः ।
प्रत्युत्थायाभिवाद्याह सानुजोऽभ्यर्चयन्मुनिम् ॥ ३८ ॥

athājagāma bhagavān
nāradaḥ saha-tumburuḥ
pratyutthāyābhivādyaḥ
sānujo 'bhyarcayan munim

atha—その後; ājagāma—到着した; bhagavān—神聖な人物; nāradaḥ—ナーラダ; saha-tumburuḥ—自分のトウンブル（楽器）と共に; pratyutthāya—座っていた座から立ち上がって; abhivādya—相応の敬意を表している; āha—言った; sa-anujaḥ—弟達と共に; abhyarcayan—適切な気持ちをこめて迎えられている間; munim—その聖者。

サンジャヤがこう話していたとき、主に仕える力強い献愛者シュリー・ナーラダがトウンブルを奏でつつその場に姿を表わした。マハーラージャ・ユディシュティラと弟たちは、座っていた座から立ち上がり、敬意を表わしながらうやうやしく迎えた。

要旨解説

デーヴァルシ・ナーラダはここで、主の親密な献愛者であることから、バガヴァーン (*bhagavān*) と呼ばれています。主と主の親密な献愛者はどちらも、主に愛情をこめて仕えている人々から同じ段階の敬意で尊ばれています。そのような親密な献愛者は主には愛しい存在です。さまざまな能力を使いながら主の栄光を人々に説き、最大限の努力をはらって、献愛者ではない人々を健全な意識に高めて献愛者に変えようとしているからです。生命体はもともと主の献愛者という本質をそなえているのですから、非献愛者になるはずはないのですが、非献愛者や非信者になってしまうのは、その人が健全な心境にはいないことを示しています。親密な献愛者は、惑わされているそんな生命体たちに近づこうとしているからこそ、主の目にはとても喜ばしい存在に映るのです。主は『バガヴァッド・ギーター』で、非信者や非献愛者を変えるために主の栄光を説く者ほど愛しい者はいない、と言います。ですから、その代表的な方であるナーラダには、人格主神その方に捧げるほどの敬意を捧げなくてはなりませんし、マハーラージャ・ユディシュティラも、気高い兄弟たちといっしょに、ナーラダという純粋な献愛者を迎える模範を示しています。ナーラダは、いつも携えている弦楽器ヴィーナを奏でながら、主の栄光だけを詠うことに没頭している献愛者なのです。

第39節

युधिष्ठिर उवाच

नाहं वेद गतिं पित्रोर्भगवन् क्व गतावितः ।

अम्बा वा हतपुत्रार्ता क्व गता च तपस्विनी ॥ ३९ ॥

yudhiṣṭhira uvāca

nāham veda gatim pitror

bhagavan kva gatāv itaḥ

ambā vā hata-putrārtā

kva gatā ca tapasvinī

yudhiṣṭhiraḥ uvāca—マハーラージャ・ユディシュティラが言った; *na*—～しない; *aham*—私自身; *veda*—それを知っている; *gatim*—出発; *pitroḥ*—叔父達の; *bhagavan*—神聖なお方よ; *kva*—どこに; *gatau*—行ってしまった; *itaḥ*—この場所から; *ambā*—母なる叔母; *vā*—どちらも; *hata-putrā*—子ども達を失って; *ārtā*—悲しんだ; *kva*—どこに; *gatā*—行ってしまった; *ca*—もまた; *tapasvinī*—苦行者。

マハーラージャ・ユディシュティラが言った。「おお、神聖なるお方よ。私の二人の叔父

がどこへ行ってしまわれたのか、私にはわかりません。また、ご子息をすべて失われて悲しみに打ちひしがれ、苦行僧のような叔母をどこにも見つけることができません」

要旨解説

高貴な魂であり、また主の献愛者であるマハーラージャ・ユディシュティラは、叔母が失ってしまった大きなもの、そして苦行者としての彼女の苦しみを思わないときはありませんでした。苦行僧はどのような苦しみに遭っても乱されませんし、逆にその苦しみが、精神的道を進もうとする思いと決意を堅くします。ガンダーリー女王は、数多くの苦境のなかでも驚くべき気質を見せ、苦行に励む者の模範とも言える女性です。母親、妻、禁欲生活をすする者として理想の方であり、また世界の歴史を見ても、ガンダーリーほどの素晴らしい質をそなえた女性はほとんどいません。

第40節

कर्णधार इवापारे भगवान् पारदर्शकः ।
अथाबभाषे भगवान् नारदो मुनिसत्तमः ॥ ४० ॥

*karma-dhāra ivāpāre
bhagavān pāra-darśakaḥ
athābabhāṣe bhagavān
nārado muni-sattamaḥ*

karma-dhāraḥ—船の船長; *iva*—~のような; *apāre*—広大な海で; *bhagavān*—主の代表者; *pāra-darśakaḥ*—対岸に向かって導くことのできる者; *atha*—このように; *ābabhāṣe*—話し始めた; *bhagavān*—その神聖な人物; *nāradaḥ*—偉大な聖者ナーラダ; *muni-sat-tamaḥ*—献愛者の哲学者たちのなかでもっとも偉大な者。

「あなたは広大な海に浮かぶ船の船長のような方であり、私たちを目的地に導くことができます」。このように讃えられた神聖な人物、哲学者の献愛者たちのなかでもっとも偉大な人物、デーヴァルシ・ナーラダが話しを始めた。

要旨解説

さまざまなタイプの哲学者がいます。そのなかで特に秀でていいるのは、人格主神を実際に見て、主への崇高な愛情奉仕にみずから捧げつくしている人物です。そのような主の純粋な献愛者のなかでも、デーヴァルシ・ナーラダは筆頭の方であり、だからこそこの節で、す

すべての哲学者献愛者の第一人者と呼ばれています。真の精神指導者からヴェーダーンタ哲学を聞いて十分な資格をそなえた哲学者にならなければ、博識な哲学者・献愛者にはなれません。堅い信念を持ち、博識で放棄心をそなえてこそ、純粋な献愛者になれるのです。主の純粋な献愛者は、私たちを無知の対岸に誘（いざな）うことができます。デーヴァルシ・ナーラダはよくマハーラージャ・ユディシュティラの宮殿を訪ねていました。パーンダヴァ兄弟は全員が純粋な献愛者でしたし、デーヴァルシは、必要なときにはいつでも彼らに優れた助言を出すつもりでいました。

第41節

नारद उवाच

मा कञ्चन शुचो राजन् यदीश्वरवंशं जगत् ।
 लोकाः सपाला यस्येमे वहन्ति बलिमीशितुः ।
 स संयुनक्ति भूतानि स एव वियुनक्ति च ॥ ४१ ॥

nārada uvāca
mā kañcana śuco rājan
yad īśvara-vaśam jagat
lokāḥ sapālā yasyeme
vahanti balim īśituḥ
sa saṁyunakti bhūtāni
sa eva viyunakti ca

nāradaḥ uvāca—ナーラダが言った; *mā*—決して～ない; *kañcana*—ぜひとも; *śucaḥ*—あなたは嘆く; *rājan*—王よ; *yat*—なぜなら; *īśvara-vaśam*—至高主の支配下で; *jagat*—世界; *lokāḥ*—全生命体; *sa-pālāḥ*—彼らの指導者を含んでいる; *yasya*—その者の; *ime*—これらすべて; *vahanti*—実行する; *balim*—崇拜の方法; *īśituḥ*—守られるために; *saḥ*—主は; *saṁyunakti*—集まる; *bhūtāni*—全生命体; *saḥ*—主は; *eva*—もまた; *viyunakti*—分散させる; *ca*—そして。

シュリー・ナーラダが言った。「おお、信仰心厚き王よ。だれもが至高主に動かされているのだから、だれのことであろうと嘆いてはいけない。だから、全生命体とその指導者たちは、十分に守られるために主を崇拜しようとしているのだ。彼らを寄せあつめ、そして別れさせているのは、主だけなのである」

要旨解説

物質界にしようと精神界にしようと、どの生命体も至高主・人格主神に支配されています。ブラフマーというこの宇宙の指導者も、はてはちっぽけなアリにいたるまで、だれもが至高主の命令に従っています。このように生命体は、もともと主の支配に従属する立場にあります。愚かな生命体、とりわけ人間は、至高者の法則に不自然にさからい、アスラという違法者になり、そして罰せられます。生命体は、至高主の命令である特定定の環境に入れられ、至高主、あるいは主に権威を与えられた代表者の命令でふたたびその立場から別の場所に移されます。ブラフマー、シヴァ、インドラ、チャンドラ、マハーラージャ・ユディシュティラ、あるいは現代の歴史では、ナポレオン、アクバル、アレキサンダー、ガンジー、スバス、ネールなど、本来はだれもが主の召使いで、主の至高の意志によって特定の地位に置かれ、そしてその地位から別の地位に移されました。だれ一人として自立している者はいません。指導者を含むだれもが主の至高性を認めたがらず、そして主にはむこうとしています。が、さまざまな苦しみという形で、さらに厳格な物質界の法則に従わされるのです。ですから、愚かな人間だけが神はいないとうそぶきます。マハーラージャ・ユディシュティラはこの紛れもない事実を確信していました。年老いた二人の叔父、そして叔母との突然の別れのために耐え難い苦しみを感じていたからです。マハーラージャ・ドゥリタラーシュトラは、過去のカルマでそのような境遇に置かれました。昔したことで生じた恩恵で苦しんだり楽しんだりしていたのですが、そのなかにも幸運な面があったことから、すばらしい弟・ヴィドゥラに恵まれ、そのヴィドゥラの教えに従い、物質界のすべてのかかわりを閉ざして救われるために宮殿を出ていったのでした。

自分に定められた幸福や苦悩は、計画で変えられるものではありません。だれであろうと、希薄なカーラ、すなわち目に見えない時によって課される苦楽に甘んじなくてはならないのです。対抗しても無駄なことです。ですから取るべき最善な対応は、解放を求めて努力することにあり、またその特権は、高い心と知性をそなえた人間だけに与えられています。人間として生きているうちに解放されるよう、さまざまなヴェーダの教えが用意されています。高い知性に恵まれたこの機会を見失う人はきびしく非難され、現世でも来世でもさまざまな種類の苦しみにさいなまれます。至高者はそんな方法を使ってだれをも支配するのです。

第42節

यथा गावो नसि प्रोतास्तन्त्यां बद्धाश्च दामभिः ।
वाक्तन्त्यां नामभिर्बद्धा वहन्ति बलिमीशितुः ॥ ४२ ॥

yathā gāvo nasi protās

tantyām baddhās ca dāmabhiḥ
vāk-tantyām nāmabhir baddhā
vahanti balim īsituh

yathā—〜と同じ; *gāvah*—牛; *nasi*—鼻によって; *protāḥ*—紐を付けられ; *tantyām*—糸によって; *baddhāḥ*—〜に縛られて; *ca*—もまた; *dāmabhiḥ*—紐によって; *vāk-tantyām*—ヴェーダ聖歌という網の中で; *nāmabhiḥ*—名称によって; *baddhāḥ*—条件づけられて; *vahanti*—実行する; *balim*—命令; *īsituh*—至高主によって支配されるために。

鼻にくくりつけられた長い縄で牛が縛られ、そのように条件づけられているように、人間も、数々のヴェーダの教えに縛られ、至高者の命令に従うよう条件づけられている。

要旨解説

どのような生物も、人であろうと、動物であろうと、あるいは鳥であろうと、「自分は自由だ」と思っていますが、実は主の厳格な法律に縛られない者はだれもいません。どのような状況にしようとその法律にはそむけない、だから主の法則は厳格なのです。人が作った法律は狡猾な無法者にくぐりぬけられるかもしれませんが、最高の立法者が作った法典の目をかいくぐることはできません。神が作った法律をちょっとでも変えれば、その立法者に見られ、罰せられる大きな危険をはらんでいるのです。至高者の法律は、さまざまな条件下で宗教法典と呼ばれていますが、宗教原則はどこでも1つで同じ、すなわち至高の神の命令、宗教法典に従うことです。それが、物質界にある条件です。物質界にいる生物は、自分が選んだ条件づけられた生活という危険を受け入れ、そして物質界の法律に騙されています。その束縛から抜けだすただ一つの方法は、進んで至高者に従う気持ちです。しかし愚かな者たちは、マヤー・幻想の束縛から解放されるかわりに、ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ、ヒンドゥー、イスラム、インド人、ヨーロッパ人、アメリカ人、中国人、その他もろもろの呼び名に縛られ、それぞれの経典や法律が命じるままに至高主の命令を実行しています。国が作った法律は宗教法典をまねた不完全な模写にすぎません。宗教とは無縁の国、あるいは神を無視した国では、市民が神の法を破ってもとやかく言いませんが、国の法律を破れば徹底的に罰します。ところがその結果一般大衆は、人が作った不完全な法律を破るよりも、神の法律を破る罰に苦しめられています。だれであっても、ただ物質界にいるだけで不完全な状態にいるため、どれほど物質的に高められた人でも完全無欠の法律は作れません。しかし、神の法律にそのような不完全さはありません。指導者が神の法律を学びさえすれば、なんの展望もない人間たちが集まってまにあわせの立法会議をする必要ありません。人間がその場凌ぎで作った法律は変えられますが、神が作った法律を変える必要はありません——あらゆる面で完璧な人格主神によって完璧に作られているからです。宗教法典

や經典の教えは、さまざまな環境にいる生命体を考慮したうえで、神の解放された代表者によって作られていますから、主の命令を実践すれば、条件づけられた生命体たちは物質界から徐々に解放されていきます。しかし生命体は、もともと至高主の永遠の召使いです。解放された境地にいる生命体は、崇高な愛情を胸に主に仕えていますから、ほんとうに自由な生活のなかで、主と同じ、あるいはときには主よりも高い生活を楽しみます。しかし、条件づけられた物質界にいる人たちはみな主になりたいと思っているため、マーヤーの幻想ゆえに、支配しようとする思いが、条件づけられた生活を長引かせています。こうして物質界にいる生命体は、永遠な召使いという本来の境地に戻って主に身を委ねるまで、ますます条件づけられていきます。『バガヴァッド・ギーター』の、そして世界にある認められた經典の最後の教えは、ふたたび主の永遠な召使いになることを説いているのです。

第43節

यथा क्रीडोपस्कराणां संयोगविगमाविह ।
इच्छया क्रीडितुः स्यातां तथैवेशेच्छया नृणाम् ॥ ४३ ॥

yathā krīḍopaskarāṇām
saṁyoga-vigamāv iha
icchayā krīḍituh syātām
tathaiवेशecchayā nṛṇām

yathā—～と同じの; krīḍa-upaskarāṇām—おもちゃ; saṁyoga—結合; vigamau—分離; iha—この世界で; icchayā—～の意志によって; krīḍituh—役割を果たすためだけに; syātām—起こる; tathā—そしてまた; eva—確かに; īśa—至高主; icchayā—～の意志によって; nṛṇām—人間の。

遊ぶ者が、好き勝手におもちゃを出したり片付けたりするように、主の至上の意志が人々を寄せ集め、そして離ればなれにする。

要旨解説

私たちが置かれている特定の環境は、昔したことに対する至高なる意志による配慮であることをよく心得ておかななくてはなりません。至高主は、『バガヴァッド・ギーター』（第13章・第23節）が確証しているように、全生命体の心臓のなかに局所的存在のパラマートマーとして住んでいますから、私たちが一生をとおしてしてきたことすべてを知っています。私たちを特定の場所に置くことで、活動の反動を私たちに与えているのです。裕福な人は自分の子どもを富貴な子として授かりますが、裕福な人の子として生まれたその子は、その場

所を授かるにふさわしいことをしたため、主の意志によってそれなりの場所に置かれたのです。そして、その場所から離される時期が来れば、子も父も幸せな関係を捨てて離ればなれになりたくないと思っけていても、至高者の意志で別の場所に連れていかれるでしょう。同じことは貧しい人たちにも起こります。豊かな人でも貧しい人でも、そのような出会いや別れにはなすすべもありません。この節で挙げられている「遊ぶ者とおもちゃ」の例は、誤解せずに理解すべきです。主は私たちの活動の反動に報いるよう縛られているのだから、遊ぶ者の例はあてはまらない、と言う人がいるかもしれませんが。しかしそれは違います。主は至高の意志そのものであり、どのような法則にも縛られないことを覚えておくべきです。カルマの法則は、活動の結果が与えられるもの、という意味が一般的ですが、特別の場合、主の意志で結果の活動が変えられることがあります。しかしこの変更は、主の意志によってなされるのであって、ほかのだれにもできることではありません。ですから、この節で挙げられている「遊ぶ者」の例は、じつに的確です。なぜなら、至高者は思い通りになんでもでき、まったく完璧で、主の活動あるいは反動に関して絶対に間違いを犯さない方だからです。主が活動の反動を変えてしまうことは、純粋な献愛者がかかわるときに特に行なわれます。『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第30-31節）で言われているように、主は無条件に身をゆだねる純粋な献愛者を、どのような罪の反動からも救い、またそのことに疑いの余地はありません。世界の歴史には、主が活動の反動を変えた例が多く残されています。主が私たちの過去の活動の反動を変えられるのであれば、主自身が自分の行動の反動に縛られるわけがありません。主は完璧な方であり、どのような法則も超越した方なのです。

第44節

यन्मन्यसे ध्रुवं लोकमध्रुवं वा न चोभयम् ।
सर्वथा न हि शोच्यास्ते स्नेहादन्यत्र मोहजात् ॥ ४४ ॥

yan manyase dhruvaṁ lokam
adhruvaṁ vā na cobhayam
sarvathā na hi śocyās te
snehād anyatra mohajāt

yat—たとえ～でも; manyase—あなたは考える; dhruvam—絶対真理; lokam—人々; adhruvam—非現実; vā—どちらでも; na—あるいはそうではない; ca—もまた; ubhayam—あるいはどちらも; sarvathā—あらゆる状況において; na—決して～ない; hi—確かに; śocyāḥ—嘆きの対象; te—彼ら; snehāt—愛着のために; anyatra—あるいはその逆; moha-jāt—当惑のために。

王よ。魂は永遠な原理であり、肉体は死滅し、すべては非人格の絶対真理のなかに存在し、すべては物質と精神の説明不可能な結合で存在すると考えても、あるいはどのような状況であろうと、惜別の思いは、幻にすぎない愛着ゆえに起こる。ただそれだけのことである。

要旨解説

全生命体は至高の生物の個別の部分体であり、主に従属し、仕えることで協力するのが本来の立場である——これが真相です。物質的な状態にしようと、完璧な知識と永遠性に満ちた解放の境地にしようと、生命体はいつまでも至高主に支配されています。しかし、真の知識のない人たちは、生命体の本来の立場についてあれこれと推論を持ち出します。それでも結局、どの分野の哲学者も、生命体は永遠で、5つの物質要素でできた外側の肉体はやがて死に、一過性の存在であることを認めています。永遠な生命体は、カルマの法則によってある物質の体から別の体に転生し、その肉体も、根本的な構造ゆえにやがて死んでなくなります。ですから、魂が別の体に転生しても、あるいは体がある時期に死んだとしてもなんら嘆くにおよびません。またほかにも、魂が肉体という物質の束縛から出たあと至高の魂のうちに融合すると信じ、さらに精神的なことも魂の存在もなく、あるのは物体だけ、と信じる人たちがいます。ある物が別の物に姿を変えている様子を、私たちは毎日目にしています。しかし、そのような変化を見ても悲しんだりはしません。上に挙げたどちらの場合でも、神聖な力は止められません。だれもその力を変えられないのですから、悲しむ理由はどこにもありません。

第45節

तस्माद्गह्यरा वैचा व्यमज्ञानकृतमात्मनः ।
कथं त्वनाथाः कृपणा वर्तेरंस्ते च मां विना ॥ ४५ ॥

*tasmāj jahy aṅga vaiklavyam
ajñāna-kṛtam ātmanaḥ
katham tv anāthāḥ kṛpaṇā
varteraṁs te ca mām vinā*

tasmāt—ゆえに; *jahi*—捨て去る; *aṅga*—王よ; *vaiklavyam*—心の不均衡; *ajñāna*—無知; *kṛtam*—～のために; *ātmanaḥ*—あなた自身の; *katham*—どのように; *tu*—しかし; *anāthāḥ*—無力な; *kṛpaṇāḥ*—哀れな生き物; *varteraṁs*—生き残ることができる; *te*—彼ら; *ca*—もまた; *mām*—私を; *vinā*—～なしで。

だから、自己について知らないからこそ感じるその不安を捨てなさい。いまあなたは、無力で哀れな彼らが、はたして自分なしで生きていけるかどうか考えている。

要旨解説

知人や親戚が無力な状態にあり、頼れるのは自分しかいない、と考えているのは無知にほかなりません。どのような生き物でも、物質界で得たそれぞれの立場に応じて、至高主の命令のもとで、あらゆる面で守られなくてはなりません。主はブータ・ブリトウ (*bhūta-bhṛt*) 「全生命体を守る者」という名前で知られています。私たちは自分の義務だけを果たさなくてはなりません。だれであろうと、至高主だけが守ることができるのですから。このことが、次の節でさらにはっきり説明されます。

第46節

कालकर्मगुणाधीनो देहोऽयं पञ्चभौतिकः ।
कथमन्यांस्तु गोपायेत्सर्पग्रस्तो यथा परम् ॥ ४६ ॥

kāla-karma-guṇādhīno
deho 'yaṁ pañca-bhautikaḥ
katham anyāṁs tu gopāyet
sarpa-grasto yathā param

kāla—永遠なる時; *karma*—活動; *guṇa*—自然の様式; *adhīnaḥ*—～の支配下; *dehaḥ*—物質の体と心; *ayam*—この; *pañca-bhautikaḥ*—5つの要素で出来ている; *katham*—どうして; *anyān*—他の者達; *tu*—しかし; *gopāyet*—保護を与える; *sarpa-grastaḥ*—蛇に噛まれた者; *yathā*—～と同じもの; *param*—他の者達。

5つの要素でできているこの濃密な体は、永遠なる時（カーラ）、活動（カルマ）、物質自然界の様式（グナ）ですすでに支配されている。ならば、すでに蛇の牙に噛まれている者たち同士が、互いに守れると思うか。

要旨解説

自由を求めて行なわれている世界の運動は、政治、経済、社会、文化など、どれをとおしたもので、だれにもなんの恩恵ももたらしません。彼らはすでに優位の力に支配されているのです。条件づけられた生命体は、永遠の時、そして自然界のさまざまな様式下にある活動として象徴される物質自然界に何から何まで自然界に支配されています。自然界には徳、

激情、無知という3つの様式があります。徳の様式にしなければ物事をありのままに見ることはできません。激情と無知にいるかぎり、物事を正しく見ることはできません。ですから、激情と無知にいる人は、自分の活動を正しい方向に導くことは不可能です。徳の質だけが、ある程度私たちを助けることができます。大半の人は激情と無知のなかにあり、そのため、そういう人たちがたてる事業も計画もほとんど人のためにはなりません。自然界の様式を超えたカーラと呼ばれる永遠なる時が存在します。物質界にあるものすべての形を、このカーラが変えてしまうからです。しばらくのあいだ有益なことはできても、やがて時の力で、どれほど素晴らしいプロジェクトでも挫折します。できることは一つ、永遠な時・カーラから免れることです。このカーラは、カーラ・サプタ (kāla-sarpa)、すなわち噛まれれば死んでしまうコブラに比較されます。コブラに噛まれたら、だれも助かりません。コブラのようなカーラ、またはその統合である自然の様式の束縛から解放される最善の治療法は、『バガヴァッド・ギーター』(第14章・第26節)が勧めているバクティ・ヨーガです。博愛主義というもっとも高い完璧なプロジェクトは、世界のすべての人々にバクティ・ヨーガの布教活動に参加してもらうことです。なぜなら、それだけが人々をマーヤーから、あるいはこの節で述べられているカーラ、カルマ、グナとして象徴される物質自然界から救うことができるからです。『バガヴァッド・ギーター』(第14章・第26節)がこの事実を確認しています。

第47節

अहस्तानि सहस्तानामपदानि चतुष्पदाम् ।
 फल्गूनि तत्र महतां जीवो जीवस्य जीवनम् ॥ ४७ ॥

ahastāni sahas-tānām
 a-padāni catuṣ-padām
 phalgūni tatra mahatām
 jīvo jīvasya jīvanam

ahastāni—手のない生物達; sa-hastānām—手を与えられている生物達; a-padāni—足を持たない生物達; catuṣ-padām—4本の足を持つ生物達; phalgūni—弱い者達; tatra—そこで; mahatām—力ある者の; jīvaḥ—生命体; jīvasya—生命体の; jīvanam—食糧。

手のない生物は手を持つ生物に食べられ、足のない生物は4本の足を持つ生物に食べられる。弱い者は強い者の食糧となり、ある生き物が別の生き物の食べ物になる——それが自然の摂理である。

要旨解説

生存競争における体系的な法則は至高の意志によって存在し、どれほどの計画をたてても、だれもその法則から逃れることはできません。至高の生物の意志に背いてこの世界に降りてきてしまった生命体たちは、マーヤー・シャクティ (māyā-śakti) 「主に権限を与えられた代表者」と呼ばれる至上の力に操られ、またそのダイヴィー・マーヤーは、条件づけられた魂を三重の苦悩で苦しめるためにあり、その苦悩の一つが、この節で「弱肉強食」と説明されています。自分よりも強い者に攻撃されれば自分を守ることはできませんし、主の意志によって、弱者、より強い者、もっとも強い者、という区分があります。トラが弱い動物を食べても、人間の私たちがそのことで嘆いてもしかたありません——それが至高主の法則なのです。しかし、人はほかの生き物を食べて生きていく必要がある、と法則が定めても、「良識の法則」もあります。人は経典に従ってこそ人。これはほかの動物にはぜったいにあてはまらない。人間は自己を悟るための機会であり、その目的を達成するためにも、最初に主に捧げられていないものは食べないことです。主は、献愛者が作った野菜、くだもの、葉、穀類を材料にした料理ならどのようなものでも受けいれてくれます。くだもの、葉、牛乳を使ったバラエティーに富む料理も主に捧げられますし、主がその料理を食べ、献愛者がそれを味わい、そのことで、生存競争の苦しみすべてが少しずつ和らいでいきます。これは『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第26節)で確認されていることです。動物を食べる習慣のある人たちでも、直接主に捧げるのではなく、主の代表者に特定の宗教儀式を経て料理を捧げることができます。経典の指示は肉食を奨励するのではなく、決められた規則によって食生活を制限するためにあります。

ある生物は、ほかの強い生物の食料になってしまう。しかし、どのような状況に置かれても、どうやって生き延びようかなどと思いつく必要はありません。生き物はどこにでもいますし、どんな場所だとしても、食料不足で飢え死にする生物はいないからです。マハーラージャ・ユディシュティラはナーラダから、叔父たちが食べられずに苦しんでいるのではと心配するにはおよびない、彼らは、ジャングルで得られる野菜を至高主のプラサーダとして食べ、解放への道を実現できるのだから、と助言を受けました。

弱い生物が強い生物の餌食になるのは存在の摂理です。どのような生物の世界でも、弱者をむさぼり食おうとする環境はいつでもあります。物質的な条件下では、不自然な方法でこの傾向を止めることはできません。あるとすれば、精神的規則を修練することで人の精神的感性を目覚めさせることだけ。しかし、精神的な規則をよりどころにして人間が弱い動物を殺しておきながら、いっぼうで平和な共存世界を人々に説くことは許されないことです。人が動物たちの平和な共存をぶちこわしておいて、自分たちは平和な暮らしを望む、ありえないことです。ですから、盲目の指導者は、至高の生物の存在をよく知り、神の国を築かなく

てはなりません。神の国、すなわちラーマ・ラージャ (Rāma-rājya) は、世界中の人々の心に神の意識を目覚めさせないかぎり、ぜったいに実現するものではありません。

第48節

तदिदं भगवान् राज्ञेक आत्मात्मनां स्वदृक् ।
अन्तरोऽनन्तरो भाति पश्य तं माययोरुधा ॥ ४८ ॥

*tad idam bhagavān rājann
eka ātmātmanām sva-dṛk
antaro 'nantaro bhāti
paśya tam māyayorudhā*

tat—ゆえに; *idam*—この表われ; *bhagavān*—人格主神; *rājan*—王よ; *ekaḥ*—絶対唯一; *ātmā*—至高の魂; *ātmanām*—主のエネルギーによって; *sva-dṛk*—質的に主のような; *antaraḥ*—外に; *anantaraḥ*—内に、そして主自身によって; *bhāti*—そのように表われて; *paśya*—頼る; *tam*—主だけに; *māyayā*—さまざまなエネルギーの表われによって; *urudhā*—多くあるように見える。

ゆえに王よ。至高主だけに頼るのだ。唯一絶対の方で、さまざまなエネルギーをとおして自らを表わし、内にも外にも存在する主を。

要旨解説

最高人格主神は絶対唯一の方ですが、本来至福に満ちた方ですから、さまざまなエネルギーをとおして自らを表わします。生命体も主の中間エネルギーの表われであり、質的に見れば主と等しく、主の外的・内的世界の内にも外にも無数の生命体が存在しています。精神界は主の内的エネルギーの表われた世界ですから、その世界にいる生命体は、外的力にけがされることなく主と同じ質を保って暮らしています。生命体は、主と質的には一つでも、物質界にけがされているために、歪んだ形で表われ、そのため、いわゆる幸せや苦しみの感情を味わっています。どれもその場かぎりの経験にすぎず、精神魂に影響を与えているわけではありません。またその幸不幸の表われは、自分は主と同じ質をそなえている、という事実を忘れてしまったからにほかなりません。しかし主は、生命体の墮落した状態を正すため、内からも外からも途切れることなく私たちに導こうとしています。内からは、局所のパラマートマーとして望みに駆られた生命体を正し、外からは、主自身の表われである精神指導者や啓示經典として。私たちは主を頼らなくてはなりません。いわゆる幸福や苦しみに乱される

のではなく、墮落した魂を外側から正そうとする主の呼びかけに応え、そして主と協力しな
りません。主の命令だけに従い、精神指導者になり、そして主と協力すべきです。物質的な
利益、ビジネスの手段、あるいは生計を立てるために、個人的な満足のために精神指導者
になるのはまちがっています。主に頼り、また主と協力している本物の精神指導者は真に主と
同じ質をそなえており、いっぽう、主を忘れていた魂はただ歪んだ表われにすぎません。だ
からこそユディシュティラ・マハーラージャはナーラダに、いわゆる幸せや苦しみに乱され
るのではなく、主だけに身をゆだね、主が降誕した理由である使命をまっとうするよう助言
されました。それが彼のにとってなによりも大切な義務だったのです。

第49節

सोऽयमद्य महाराज भगवान् भूतभावनः ।
कारुरूपोऽवतीर्णोऽस्यामभावाय सुरद्विषाम् ॥ ४९ ॥

so 'yam adya mahārāja
bhagavān bhūta-bhāvanaḥ
kāla-rūpo 'vatīrṇo 'syām
abhāvāya sura-dviṣām

saḥ—その至高主; ayam—主シュリー・クリシュナ; adya—現在; mahārāja—王よ;
bhagavān—人格主神; bhūta-bhāvanaḥ—創造された万物の創造者あるいは父; kāla-rūpaḥ—す
べてを食いつくす時という姿をとって; avatīrṇaḥ—降りて; asyām—世界に; abhāvāya—除去
するために; sura-dviṣām—主の意志に反する者達。

その最高人格主神、主シュリー・クリシュナは、すべてを食いつくす「時」(カーラ・ル
ーパ)として姿を変えて地上に現われ、妬ましい者たちを世界から取りのぞくために降誕さ
れた。

要旨解説

人間には2種類、すなわち嫉妬深い者、従順な者がいます。至高主は唯一の方で、全生命
体の父ですから、妬ましい者たちでもじつは主の子どもなのですが、彼らはアスラという名
前で呼ばれています。いっぽう至高の父に従順な生命体たちは、物質観念にけがれていない
ためにデーヴァター・半神と呼ばれます。アスラたちは、主の存在を否定するほど主を嫌っ
ているだけでなく、ほかの生命体たちも忌み嫌っています。世界がこのようなアスラで充満
すると、主は自ら降誕して彼らを世界から取りのぞいて正すことがあり、そしてパーンダヴ

ア兄弟のようなデーヴァターたちに世界を統治させます。主がカーラとなって変装するという説明は重要です。主は危険な方ではなく、永遠・知識・喜びという超越的な姿を持つ方です。主は、献愛者には真の姿をしめし、献愛者でない者たちにはカーラ・ルーパという原因となる姿で現われます。主のこの原因として姿はアスラたちには不快きわまるもので、彼らは主に滅ぼされずに安全な立場を守るため、主に姿はない、と考えます。

第50節

निष्पादितं देवकृत्यमवशेषं प्रतीक्षते ।
तावद् यूयमवेक्ष्यं भवेद् यावदिहेश्वरः ॥ ५० ॥

*niṣpāditam deva-kṛtyam
avaśeṣam pratikṣate
tāvad yūyam avekṣadhvam
bhaved yāvad iheśvaraḥ*

niṣpāditam—執行した; *deva-kṛtyam*—半神達のために為されなくてはならなかったこと; *avaśeṣam*—休息; *pratikṣate*—待たされて; *tāvat*—その時まで; *yūyam*—あなた達パーンダヴァ兄弟達; *avekṣadhvam*—見つめ、そして待つ; *bhaved*—～できる; *yāvat*—～の間ずっと; *iha*—この世界で; *iśvaraḥ*—至高主。

主は半神たちを助ける義務をすでにやりとげられ、休息の時を待っておられる。あなたたちパーンダヴァ兄弟は、主が地上にとどまっておられるまで待つように。

要旨解説

主は、主や献愛者を憎むアスラたちに悩まされる半神・物質界の管理者を救うために、精神界の頂点にある自分の住居（クリシュナローカ惑星）から降誕します。これまで述べられているように、条件づけられた生命体は、この世界の資源を支配し、見わたすものすべての偽の主人になろうとする強い望みに動かされ、自分から、物質とかかわることを選んでしまいます。だれもがイミテーションの神になろうとしているのです。そのような偽物神々のあいだには激しい競争があり、互いに張り合っている彼らは「アスラ」という名前で一般に知られています。物質界にアスラがはびこれば、主の献愛者にとっては地獄となんら変わりありません。アスラの数が増えれば、もともと主に仕える気質を持つ一般大衆、そして高位の惑星に住む半神たちを含む主の純粋な献愛者たちは主に救いを求めて祈ります。そして主は自分の住居からみずから降誕するか、あるいは自分の献愛者を代理として遣わせ、人間社会

の、あるいは動物社会の墮落した状態でさえ変えようとしませう。そのような混乱は人の社会だけではなく、高位の惑星の半神たちを含む動物、鳥、ほかの生物たちのあいだにでさえ起こることです。主シュリー・クリシュナは、カムサ、ジャラーサンダ、シシュパーラのような悪魔たちを抹殺するためにみずから降誕し、マハーラージャ・ユディシュティラが統治していた時代に、そのほとんどのアスラたちを殺しました。そしていまユディシュティラ王は、主の意志でこの世界に現われた主自身の王家、すなわちヤドゥ・ヴァンシャの崩壊を待っています。主は永遠な住居に戻っていくまえに、彼らを地上から連れ出したいと考えました。ナーラダは、ヴィドゥラのように、ヤドゥ王家の崩壊をすぐに暴露したわけではないのですが、間接的に、ユディシュティラ王と兄弟たちに、その出来事が起こるまで、そして主が去っていくまで待つように、とヒントを与えていたのです。

第 5 1 節

धृतराष्ट्र सह भ्रात्रा गान्धार्या च स्वभार्यया ।
दक्षिणेन हिमवत ऋषीणामाश्रमं गतः ॥ ५१ ॥

*dhṛtarāṣṭraḥ saha bhrātrā
gāndhāryā ca sva-bhāryayā
dakṣiṇena himavata
ṛṣiṇām āśramam gataḥ*

dhṛtarāṣṭraḥ—ドゥリタラーシュトラ; *saha*—〜と共に; *bhrātrā*—彼の弟ヴィドゥラ; *gāndhāryā*—ガンダーリーも; *ca*—そして; *sva-bhāryayā*—彼自身の妻; *dakṣiṇena*—南側寄りの; *himavataḥ*—ヒマラヤ山脈の; *ṛṣiṇām*—リシ達の; *āśramam*—庇護地に; *gataḥ*—彼は行ってしまった。

王よ。叔父のドゥリタラーシュトラ、その弟ヴィドゥラ、ドゥリタラーシュトラの妻ガンダーリーは、偉大な聖者たちの庇護地があるヒマラヤ山脈南部に行った。

要旨解説

悲嘆にくれるマハーラージャ・ユディシュティラの気持ちをなだめるため、ナーラダはまず哲学的な視点から話し、つぎに未来を見る透視力で、叔父が将来することについて次のように説明をはじめました。

第52節

स्रोतोभिः सप्तभिर्या वै स्वर्धुनी सप्तधा व्यधात् ।
सप्तानां प्रीतये नाना सप्तस्रोतः प्रचक्षते ॥ ५२ ॥

*srotobhiḥ saptabhir yā vai
svardhunī saptadhā vyadhāt
saptānām prītaye nānā
sapta-srotaḥ pracakṣate*

srotobhiḥ—流れによって; *saptabhiḥ*—7 (区分) によって; *yā*—川; *vai*—確かに; *svardhunī*—神聖なガンジス川; *saptadhā*—7つの支流; *vyadhāt*—創造された; *saptānām*—その7つの; *prītaye*—～の満足のために; *nānā*—さまざまな; *sapta-srotaḥ*—7つの源; *pracakṣate*—名前で知られている。

要旨解説

その場所をサプタスロータ（7つに区分された領域）と言う。神聖なガンジス川の水がそこで7つの支流に分けられるからである。これは7人の偉大な聖者たちを満足させるためになされた。

第53節

स्नात्वानुसवनं तस्मिन्हुत्वा चाग्नीन्यथाविधि ।
अभक्ष उपशान्तात्मा स आस्ते विगतैषणः ॥ ५३ ॥

*snātvānusavanaṁ tasmin
hutvā cāgnīn yathā-vidhi
ab-bhakṣa upāśāntātmā
sa āste vigataiṣaṇaḥ*

snātvā—沐浴によって; *anusavanam*—定期的に3回（朝、正午、夕方）; *tasmin*—7つに別れたそのガンジス川で; *hutvā*—アグニ・ホートウラ儀式をすることで; *ca*—もまた; *agnīn*—火の中に; *yathā-vidhi*—経典の教えにただ従って; *ab-bhakṣaḥ*—水だけを飲むことで絶食している; *upāśānta*—完全に抑制して; *ātmā*—濃密な感覚と希薄な心; *saḥ*—ドゥリタラーシュトラ; *āste*—位置されるだろう; *vigata*—～のない; *eṣaṇaḥ*—家族の幸せに関連した思い。

サプタスロータの川岸で、ドゥリタラーシュトラはアグニ・ホートウラの儀式をし、毎日

三回、朝、正午、夕方に沐浴し、水だけを飲んでアシュターンガ・ヨーガを始めた。この修練をすることで、心と感覚は抑制され、家族への愛着から完全に解放される。

要旨解説

ヨーガ法は、感覚や心を抑制してそれらを物質から精神に向かわせる機械的な方法です。その予備的な方法として、座位、瞑想、精神的な思考、体内を流れる空気の抑制、徐々に高まっていくトランス状態、そしてパラマートマーという絶対的人物への遭遇などが含まれます。精神的段階に高めてくれるこの機械的な方法には、1日3回の沐浴、可能なかぎりの絶食、座って思考を精神的物事に集中させることが含まれ、やがて徐々に物質的な対象（ヴィシヤヤ・viśaya）から解放されていきます。物質存在とは、幻でしかない物質的な物事に思いを没頭させることです。家、国、家族、社会、子どもたち、財産、仕事など、どれも精神魂・アートマーを包みこんでいる物質の覆いであり、ヨーガのシステムは、このような幻想の思考から私たちを解放させ、そして徐々に絶対的人物・パラマートマーに意識を向かわせてくれます。私たちは、世俗的なかわりや教育に導かれて軽薄なものごとで夢中になることを学んできましたが、ヨーガはそのようなことをすべて忘れる方法です。現代のいわゆるヨーギーやヨーガは、奇術まがいの見せ物でしかなく、なにも知らない人たちはそのような偽物に魅了されたり、ヨーガ・システムを、体の病気を治してくれたりする安価な治療法だと思ひこんでいます。しかし真実は、ヨーガ・システムは、生存競争をとおして積み重ねてきた思いを忘れる方法なのです。ドゥリタラーシュトラはこれまで、息子たちの生活の水準を高めたり、あるいは息子たちのためにパーンダヴァ兄弟の財産を奪ったりすることで家族生活を改善するために生きてきました。それはどれも、精神的な力についてなにも知らない完全な物質主義者があたりまえにしていることです。また、このような行ないが人を地獄に落とし入れることなど、ドゥリタラーシュトラには知るよしもありませんでした。そんな彼も、弟のヴィドゥラのおかげで目覚め、幻想にかられたそれまでの悪業に気づき、そしてその気づきによって、精神的悟りを得るために家を出ることができました。シュリー・ナーラダデーヴァはここで、神聖なガンジス川の流れて浄化された場所で彼が精神的に高められていくことを予言しています。水だけを飲み、固形物は摂らなれども絶食です。そして精神的知識を高めるのに必要なことです。愚かな人は、定められた原則には従わない安っぽいヨーギーになろうとしています。まず舌がコントロールできない人はヨーギーにはほとんどなれません。ヨーギーとボーギー (bhogī) は相反する2つの言葉です。ボーギー、つまりなんでも食べて飲んで楽しむ人間はヨーギーにはなれません。ヨーギーは無制限に飲食することを許さないからです。ドゥリタラーシュトラが、水だけを飲み、神聖な雰囲気漂う場所で心穏やかに座り、主ハリ・人格主神への思いに深く没頭している様子をこの節から学ぶことができます。

第54節

जितासनो जितश्वासः प्रत्याहतषडिन्द्रियः ।
हरिभावनया ध्वस्तरजःसत्त्वतमोमलः ॥ ५४ ॥

jitāsano jita-śvāsaḥ
pratyāhṛta-ṣaḍ-indriyaḥ
hari-bhāvanayā dhvasta-
rajaḥ-sattva-tamo-malaḥ

jita-āsanaḥ—座位を抑制する者; *jita-śvāsaḥ*—呼吸法を支配した者; *pratyāhṛta*—引き返している; *ṣaḍ*—6つ; *indriyaḥ*—諸感覚; *hari*—絶対人格主神; *bhāvanayā*—～に没頭して; *dhvasta*—征服して; *rajaḥ*—激情; *sattva*—徳; *tamaḥ*—無知; *malaḥ*—穢れ。

座位（ヨーガ・アーサナ）と呼吸を制御した者は、感覚を絶対人格主神に向けることができ、その結果、物質自然界の様式、すなわち平凡な徳、激情、無知の穢れから免れる。

要旨解説

ヨーガ法の予備的修練には、アーサナ、プラーナーヤーマ、プラチャーハーラ、ヂャーナ、ダーラナーなどがあります。マハーラージャ・ドウリタラーシュトラはこのような予備的活動の成功を達成することでしょう。浄化された場所に座り、1つの対象、すなわち最高人格主神（ハリ）に集中していたからです。こうして、彼のすべての感覚が主への奉仕に使われていました。この方法は、献愛者を自然界の三様式の穢れから直接助けてくれます。一番高い様式、つまり徳の様式でさえ、物質的な束縛の原因にもなるのですから、ほかの様式、つまり激情や無知が私たちを束縛することは言うまでもありません。激情と無知は、物質的な楽しみを求めようとする気質に拍車をかけ、強い欲望が富や権力を得ようとする気持ちを刺激します。この2つの底辺の様式を超え、完全な知識と道徳に支えられた徳の様式に高められた人でも、さまざまな感覚、つまり目、舌、鼻、耳、感触などを抑えられるわけではありません。しかし、主ハリの蓮華の御足に身をゆだねた人は、ここで言われているように、物質自然界の様式の影響を超越し、主への奉仕に安定することができます。ですから、バクティ・ヨーガの方法は、主への愛情奉仕に直接適用することができます。この方法を修練する人は、物質的な活動に巻きこまれなくなります。感覚を物質的な執着から主への超越的な愛情奉仕に方向転換させるこの方法をプラチャーハーラ、またこの方法全体をプラーナーヤーマともいい、修練者を最終的にサマーディ、すなわち至高主を必ず満足させる没頭の境地に到達させてくれます。

第 5 5 節

विज्ञानात्मनि संयोज्य क्षेत्रज्ञे प्रविलाप्य तम् ।
ब्रह्मण्यात्मानमाधारे घटाम्बरमिवाम्बरे ॥ ५५ ॥

*vijñānātmani saṁyojya
kṣetrajñe pravilāpya tam
brahmaṇy ātmānam ādhāre
ghaṭāmbaram ivāmbare*

vijñāna—浄化された本性; *ātmani*—知性の中で; *saṁyojya*—完璧に安定して; *kṣetra-jñe*—生命体に関して; *pravilāpya*—融合している; *tam*—彼を; *brahmaṇi*—至高者の中で; *ātmānam*—純粋な生命体; *ādhāre*—源の中で; *ghaṭa-ambaram*—閉ざされた世界の中の空間; *iva*—～のような; *ambare*—至高の空間の中で。

ドゥリタラーシュトラは、自分の純粋な本性を知性と結びつかせ、そして生命体として、自分が主と同じ質をそなえているという知識で、至高の生物のなかに融合しなくてはならない。この閉ざされた空間から解放され、精神界に高められなくてはならないのである。

要旨解説

生命体は、物質界を支配しようとする望みを持ち、至高主との協力を拒もうとするため、物質の総合体、すなわちマハトウ・タットウヴァとかかわるようになり、そのマハトウ・タットウヴァのために、自分を物質界、知性、心、感覚と同一視する間違っただけの考えを持つようになります。この考えが、魂の純粋な精神的同一性を覆い隠してしまうのです。ヨーガを修練することで、自分の純粋な同一性が自己の悟りをとおして実現されると、5つの濃密な要素と希薄な要素、心、知性をもう一度マハトウ・タットウヴァのなかに融合させて自分本来の立場に戻らなくてはなりません。こうして、マハトウ・タットウヴァの束縛から解放され、至高の魂のなかに自分を融合させるのです。言いかえれば、私たちは質的に至高の魂とまったく同じであることを悟らなくてはならないのであり、その結果として、自分本来の純粋な知性を使って物質界の空間を超越し、そして主への超越的な愛情奉仕に励むことができるようになります。これが、精神的本性をもっとも高く、完璧に高めることであり、ドゥリタラーシュトラはこの境地をヴィドゥラと主の恩寵によって達成しました。主の慈悲は、ドゥリタラーシュトラがヴィドゥラと直接かかわりを持ったからこそ授けられたものであり、主はじっさいに、彼がヴィドゥラの教えを修練していたときに完璧な境地に到達できるよう助けています。

主の純粋な献愛者は、物質界の惑星に住むことはありませんし、物質要素と接していることも感じません。献愛者が持ついわゆる肉体も、主と同じ精神的流れに満たされているために存在しておらず、ゆえに、マハトウ・タットウヴァという物質総体の穢れからは永遠に解放されています。献愛者はいつも精神界に住んでいます。その境地は、自分が行なった献愛奉仕の力で物質界の7重の覆いを貫いた結果です。条件づけられた魂は、その覆いの中に住み、解放された魂はその覆いを遙か遠く超えた世界に住んでいます。

第56節

ध्वस्तमायागुणोदको निरुद्धकरणाशयः ।
 निवर्तिताखिलाहार आस्ते स्थाणुरिवाचलः ।
 तस्यान्तरायो मैवाभूः संन्यस्ताखिलकर्मणः ॥ ५६ ॥

*dhvasta-māyā-guṇodarko
 niruddha-karaṇāśayaḥ
 nivartitākhilāhāra
 āste sthāṇur ivācalaḥ
 tasyāntarāyo maivābhūḥ
 sannyastākhila-karmaṇaḥ*

dhvasta—破壊されて; *māyā-guṇa*—物質自然界の様式; *udarkaḥ*—影響の後; *niruddha*—停止されて; *karaṇa-āśayaḥ*—感覚と心; *nivartita*—止まって; *akhila*—すべて; *āhāraḥ*—感覚のための食べ物; *āste*—座っている; *sthāṇuḥ*—動かない; *iva*—~のように; *acalaḥ*—固定されて; *tasya*—彼の; *antarāyaḥ*—障害; *mā eva*—決してそのようではない; *abhūḥ*—~であること; *sannyasta*—放棄して; *akhila*—あらゆる種類; *karmaṇaḥ*—物質的義務。

ドゥリタラーシュトラは、感覚の動きを（外からでさえ）すべて止め、物質自然界の様式に動かされている感覚の相互作用に耐えなくてはならない。物質的な義務をすべて放棄したあと、解放への道に横たわるすべての障害を越え、不動の境地に身を置かなくてはならない。

要旨解説

ドゥリタラーシュトラは、ヨーガの方法に従い、物質的活動の反動すべてを打ちけす境地に達しました。物質自然界の様式の力は、様式の犠牲者を、物質を楽しもうとする飽くことのない望みに引きつけますが、ヨーガを修練すれば、このようなまちがった楽しみから逃れることができます。どの感覚も、楽しむ対象を求めていつも忙しく働いており、このように

条件づけられた魂はあらゆる方向から攻められており、なにを求めても心の安定を得ることはできません。マハーラージャ・ユディシュティラは、叔父をまた宮殿に連れ戻そうなどという考えにとらわれないようナーラダから助言を受けました。すでにドウリタラーシュトラは物質に対する魅力を完全に超えていたのです。物質自然界の様式（グナ）は、各様式特有のさまざまな働きをしますが、その三様式を超えた次元には精神的な様式があり、それは絶対的です。Nirguṇa（ニルグナ）は反動がない、という意味です。精神的様式、そしてその結果は同じです。ですから、精神的質とその対をなす物質的質とは、ニルグナという言葉によって区別されています。自然界の三様式を完全に克服した人が、精神的世界に入ることを許されるのであり、その精神的様式に導かれた活動が献愛奉仕、すなわちバクティと呼ばれます。ですから、バクティは絶対者とじかに接触することで得られるニルグナの境地です。

第57節

स वा अद्यतनाद् राजन् परतः पञ्चमेऽहनि ।
कलेवरं हास्यति स्वं तच्च भस्मीभविष्यति ॥ ५७ ॥

*sa vā adyatanād rājan
parataḥ pañcame 'hani
kalevaram hāsyati svam
tac ca bhasmī-bhaviṣyati*

saḥ—彼; vā—十中八九; adya—今日; tanāt—～から; rājan—王よ; parataḥ—この先; pañcame—5番目; ahani—日; kalevaram—体; hāsyati—捨てるだろう; svam—彼自身の; tat—それ; ca—もまた; bhasmī—灰; bhaviṣyati—～に変わるだろう。

王よ。彼は、ほぼまちがいなく、今日から5日後に肉体を捨てるだろう。そしてその体は灰と化すはずである。

要旨解説

ナーラダ・ムニの予言が、叔父のいる場所に行こうとするユディシュティラ・マハーラージャを制止しています。たとえドウリタラーシュトラが神秘的力で体を捨てたとしても、葬式の必要はありませんでした。ナーラダ・ムニが「彼の体は灰になる」と言っているのですから。そのような神秘的力が、ヨーガ・システムの完成を可能にします。ヨーギーは、自分で作った火で自分の体を灰にし、時間を選んで肉体を捨て、行きたい惑星に行くことができます。

第58節

दह्यमानेऽग्निभिर्देहे पत्युः पत्नी सहोत्तजे ।
बहिः स्थिता पतिं साध्वी तमग्निमनु वेक्ष्यति ॥ ५८ ॥

*dahyamāne 'gnibhir dehe
patyuh patnī sahoṭtaje
bahiḥ sthitā patim sādhvī
tam agnim anu vekṣyati*

dahyamāne—それが燃えている間; *agnibhiḥ*—その火によって; *dehe*—体; *patyuh*—夫の; *patnī*—妻; *saha-utaje*—藁葺きの小屋と共に; *bahiḥ*—外側; *sthitā*—位置されて; *patim*—夫に; *sādhvī*—貞節な女性; *tam*—その; *agnim*—火; *anu vekṣyati*—堅い集中力で見つめながら火の中に入っていきだろう。

かの貞節な妻は、神秘的力がかやぶきの小屋とともに自分の体を焼くであろう夫を見て、不動の集中力でみずからも火の中に入っていきだろう。

要旨解説

ガーンダーリーは、一生夫に付きそう貞節で理想的な女性だったからこそ、かやぶきの小屋とともに神秘的ヨーガの火で自分を焼いている夫を見て、絶望しました。100人の息子を失ったあと家をあとにし、もっとも愛する夫が燃えている様を見たのです。そしていま、孤独の身になってしまったことを感じたかのじよは、夫の火の中に身を投げ、死んで夫に従ったのです。死んでいく夫の火葬の火に貞節な女性が入っていくことをサティー (*sati*) の儀式といい、その行為は女性にとってももっとも完璧な境地だとされています。しかし最近では、このサティーの儀式は不快きわまる犯罪行為と考えられています。それは、まったくその気持ちのない女性にその行為を強いているからです。墮落した現代では、どのような女性でも、ガーンダーリーやいにしえの女性たちが従っていたサティーの儀式に従うことなどできるものではありません。ガーンダーリーのような貞節な女性は、夫の死という悲しみを、燃えさかるじっさいの火よりも強く感じます。そのような女性は、みずから進んでサティーの儀式をすることができ、それは強制されて行なう罪な行為ではありません。ただ儀礼的になされるのであれば、そしてこの決まりに従うよう女性を強要するのであれば、それは犯罪行為となり、そのためいまでは国の法律で禁じられています。ナーラダからマハーラージャ・ユディシュティラに伝えられたこの予言は、未亡人となった叔母のもとに行くことを禁じているのです。

第59節

विदुरस्तु तदाश्चर्यं निशाम्य कुरुनन्दन ।
हर्षशोकयुतस्तस्माद् गन्ता तीर्थनिषेवकः ॥ ५९ ॥

*viduras tu tad āścaryam
niśāmya kuru-nandana
harṣa-śoka-yutas tasmād
gantā tīrtha-niṣevakaḥ*

viduraḥ—ヴィドゥラもまた; *tu*—しかし; *tat*—その出来事; *āścaryam*—素晴らしい;
niśāmya—見ている; *kuru-nandana*—クル王家の子息よ; *harṣa*—歡喜; *śoka*—悲嘆; *yutaḥ*—
に影響されて; *tasmāt*—その場所から; *gantā*—去っていくだろう; *tīrtha*—巡礼の地;
niṣevakaḥ—啓発されるために。

ヴィドゥラは喜びと悲しみに打たれ、その神聖な巡礼の地を去っていくことだろう。

要旨解説

ヴィドゥラは、兄のドゥリタラーシュトラが解放されたヨーギーとして素晴らしい他界を遂げたことに驚きました。なぜなら、兄は物質主義に強く執着した生涯をおくっていたからです。もちろん、ドゥリタラーシュトラが望ましい人生の目標を達成できたのは、ひとえにヴィドゥラのおかげです。ですからヴィドゥラはその出来事を聞いて嬉しく思ったと同時に、兄を純粋な献愛者に変えられなかったことを残念に思っています。これはヴィドゥラがいたらなかったからではありません。ドゥリタラーシュトラが、全員が主の献愛者だったパーンダヴァ兄弟に敵意を抱いていたことの結果なのです。ヴァイシュナヴァの御足を冒瀆することは、主の蓮華の御足を冒瀆することよりも危険です。もちろんヴィドゥラは、物質主義的な生涯をおくってきたドゥリタラーシュトラに慈悲を授ける寛大な人物ですが、結局、現世におけるそのような慈悲の最終的な結果は至高主の意志にかかっています。そのためドゥリタラーシュトラは解放だけを達成したのであり、そのような境地をなんども繰り返したあとに、献愛奉仕の境地に到達することができます。ヴィドゥラは兄と義理の姉の死をもちろん痛ましく思っており、そのような悲しみを癒すには巡礼地に旅立つしかありません。こうしてマハーラージャ・ユディシュティラには、生き残ったもう一人の叔父であるヴィドゥラを呼びもどす可能性は残されていませんでした。

第60節

इत्युक्त्वाथारुहत् स्वर्गं नारदः सहतुम्बुरुः ।
युधिष्ठिरो वचस्तस्य हृदि कृत्वाजहाच्छुचः ॥ ६० ॥

ity uktvāthāruhat svargam
nāradaḥ saha-tumburuḥ
yudhiṣṭhiro vacas tasya
hṛdi kṛtvājahāc chucaḥ

iti—このように; uktvā—呼びかけて; atha—その後; āruhat—昇っていった; svargam—宇宙空間に; nāradaḥ—偉大な聖者ナーラダ; saha—～と共に; tumburuḥ—彼の弦楽器; yudhiṣṭhiraḥ—マハーラージャ・ユディシュティラ; vacaḥ—教え; tasya—彼の; hṛdi kṛtvā—心に留めている; ajahāt—捨て去った; śucaḥ—すべての嘆き。

偉大な聖者ナーラダはこのように話したあと、ヴィーナーを奏でながら宇宙に飛び立っていった。ユディシュティラは彼の教えを胸に刻み、いっさいの嘆きを絶つことができた。

要旨解説

シュリー・ナーラダジーは、主の慈悲で精神的な体を授かった永遠なる宇宙飛行士です。物質界・精神界どちらの宇宙空間も、なにものにも邪魔されることなく旅し、無限の空間にあるどの惑星にも瞬時に行くことができます。彼が前世で女給の子だったことはすでに学びました。純粋な献愛者とのふれあいで永遠な宇宙飛行士の境地に高められ、こうして自由に行動することができるようになったのです。ですから、私たちもナーラダ・ムニの足跡に従うべきであり、機械を使った方法で別の惑星に行こうとするむなしい努力をするべきではありません。マハーラージャ・ユディシュティラは信心深い王でしたから、ナーラダ・ムニにときおり出会う機会がありました。ナーラダ・ムニに会いたいと願う人は、まず敬虔な気質を培い、ナーラダ・ムニの足跡に従わなくてはなりません。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第13章、「ドウリタラーシュトラ、宮殿を去る」の要旨解説を終了します。